見た目は虚、中身は人間な俺

Gotoh

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
見た目は虚、中身は人間な俺

【Ｎコード】
Ｎ３９２５Ｋ

【作者名】
Ｇｏｔｏｈ

【あらすじ】
何か気付くとＢＬＥＡＣＨの世界にトリップしていた。しかも何故か虚の姿で。死神には狙われて、虚とは生存競争。哀れな高校生の運命は！？

第一話　頭が痛い（前書き）

どうもＧｏｔｏｈです。急に新しい小説が書きたくなり書くことにしました。とは言っても初心者なので指摘等お願いします。ではどうぞ。

第一話　頭が痛い

……うぅ……。何でだ？頭が痛え……。
ここはどこだ？　……頭痛え……。
そして……頭痛え……。

じゃなくて、どうなってる？俺は確か学校の帰りにロ〇ソンでジャンプを買って……部屋でゴロゴロしながらジャンプを読んでいたんだけどな……。

……ふぅ、頭が冴えてきた。
まず俺は、普通の高校生で、勉強はそこそこ。んで名前は……名前は……。忘れた？　……まあ、いいか。
そんなことより今の状況を整理しよう。

まず、俺は自身の腕を見る。俺の腕は黒くて、長く鋭い爪が伸びていて、何か尻からは尻尾的な物の存在を感じる……ってなんじゃこりゃぁぁぁぁぁ！？

……何これ？
俺は今、どっかの街（雰囲気的に東京かな？）にいるんだけど……
誰も俺の方を見ない……。
普通さぁパニックになって騒がれんじゃん？
何で通行人ノーリアクション？
まるで存在を感知されてないような……。

「こんな通行人だらけの所の虚がいるとはな」

後ろから聞いたことのある声と何か引っかかるワードが……。
「おわぁぁぁぁぁ！？」
何か声が聞こえたと思ったら切りかかられた。
俺は悲鳴を上げながら何とかかわした。
「いきなり何しやがる！危ねぇじゃねぇか！」
「ん？何だコイツ？」
俺は怒鳴りながら振り向くとそこには、オレンジ色の髪の男がでっ

かい刀を持って立っていた・・・ってコイツ見たことあるってか……、

「一護じゃね？」

「あ？何で俺の名前知ってんだ？」

えええええええええええ！？

何でだぁぁぁぁぁぁ！？

それにさっき虚ってまさか俺……虚ぉぉぉぉぉぉ！？

……落ち着け俺。とりあえず状況整理だ。恐らく俺は何らかの原因でＢＬＥＡＣＨの世界にトリップしたのだろう。

でも何で虚？

「まあ、いいや俺は仕事をするか」

気付くと構えてる一護さん。

絶望的だが活路はある。

よく見ると一護の斬魄刀には鍔も鞘も付いてる。ようするにまだ始解すら出来てないようだ。

それなら斬撃（月牙天衝）も飛んで来ないだろうし逃げ切れそうだ。

更に俺の脚は何かメッチャ力がみなぎってくる。恐らく俺はスピードは中々ありそうだ。

よし、逃げよ♪

「アバヨォォォ代行ぉぉぉぉ！！」

「あっ待ちやがれ！」

取り敢えず屋根目指して跳ぶ。

ビョォォン。

すげー、脚力はコンクラスかな。

俺は屋根から屋根と飛び回り、どんどん一護と距離を作る。

やがて諦めたのか後ろから追って来る気配が無くなった。

今日から俺の人生は大幅に変わっていくことになる。……まあ言うまでないか。

第一話　頭が痛い（後書き）

どうでしたか？早速これからの方向性に迷ってますが頑張ります。
感想等お待ちしております。では。

第二話　京都に行こう的なノリで（前書き）

どうも作者です。
アフターダークカッケェとか思いながら小説書いていました。
・・・関係ないですね、スイマセン。
ではどうぞ。

第二話　京都に行こう的なノリで

やあみんな♪何故か虚にされた俺だよ……。

さて、俺は何とか一護を振り切ったわけだが……腹減った……。

この世界に来てから半日経った。そりゃあ腹減るって。

だけど問題が、

まず魂魄とかを喰わないといけないこと。だが、人1人とて殺したことがない俺には死んでいるとは言え人であるプラスも、霊力の高い人も襲うなんて無理な話だ……。

ん～虚かなぁ。人助けにもなるし、もしかしたら死神の信頼を得られるかも。

とか考えていると、

「嫌、来ないで……！！」

とか聞こえるし片や、

「グヒヒヒヒ」

とか下品で人とは思えない笑い声も聞こえてきた。
もしやと思い声の方を向くとそこには、整（プラス）と思われる若い女の霊と5メートルくらいはある虚がいた。

（俺のディナー決定♪）

俺は下品な虚のもとへ駆け出す。

「あぁ？」

こちらに気付いたのか下品な虚はこちらを向く。

「おい何だテメー？　コイツは俺の得m「黙れ」ぶほぉぉぉ……！？」

何か言おうとしていたが気にせず蹴る。

「いってーなぁテメー！」

少し吹っ飛び起き上がった下品な虚は怒鳴ってきた。

やっぱ虚は改めて見る少し怖え。

５メートルくらいあるし、頭は髑髏、腕は異様に長くそれでいて太い。

足はケンタウロスみたいで４本あるし、長く太い尾まである。

だけど俺はそれでも引かない。

そう、食欲を満たすために。

俺は決めた。京都に行こう的なノリで、そうだ虚を食べよう、と。

「悪いがお前には俺のディナーになってもらうぜ」

「は？テメーみてーなチビに俺が負ける訳ねぇじゃん」

……下品な虚の言う通り俺は虚にしては小さい。

ヤツは５メートル、俺は３メートル。

だが俺にはスピードがある。勝機はある！（多分…）

「オラァァァァ！」

先手必勝ぉぉぉぉぉぉ！

俺は思い切り地面を蹴り、一気に懐に潜り込み爪を突き出す。決まった、と思ったが、

「おふぅっ！？」

蹴られた。前足で。

１０メートルくらいは吹っ飛んだ。

コンクリートに頭を打った。痛え。

くそっやられキャラかと思ったが中々やるじゃねーか……。

「ったく俺に喧嘩売ってくるとは、死神以来だな」

道理で。このクソヤロウは少なくとも死神との戦闘経験が一回以上はあるってことか。

頭使わんと勝てねえなこりゃ。

前回と同じく活路はある。

まあ前回と同じく脚力で、だが……。

「おぉぉぉぉぉ！」

まずはスピードで翻弄する。

ケンタウロスもどき（勝手に改名）の周りを縦横無尽に動き回り隙を伺う。

取り敢えずケンタウロスもどきの斜め後ろから爪を突き出す。

ザシュッ。

よし、今度は当たった！

それにしてもこの爪、中々切れ味がいい。脚に加えこれも使える。

「ぐあぁっ！？」

俺が刺したのは右後ろ足。ケンタウロスもどきは呻きながら少しバランスを崩す。

どうやらあの巨体は４足あってなんぼって感じみたいだ。弱点丸出S……、

「糞ったれぇ……ぶっ殺してやる！！」

勝てる、と思ってた矢先ケンタウロスもどきの体が変形し始めた。

ゴキゴキゴキゴキ。

何か骨格が変わってきている。

だがここで黙って変形を見届けるほどアニメキャラじゃないのが俺。

「アホが隙だらけだ」

俺はケンタウロスもどきの頭狙って爪を振り下ろす。

ズパッッ。

ちっ防がれたか……。

見るとケンタウロスもどきは左腕でガードしていたみたいで左腕を切断していたが、やつはまだ生きている。

「アアアアアァァァ！？」

ケンタウロスもどきは切られた左腕から血を噴き出す。

そしてケンタウロスもどきはよろけながら、

「よくも、よくもぉぉぉ！」

とか言って来た。

ゴキゴキゴキュッ。

結局変形されちまった……。

ケンタウロスもどきは足が太くなり二足歩行に変わっていた（また改名しないと）。だが切られた左腕はそのままだ。

……心なしか霊圧も増している気がする。

「死にやがれ！！」

虚（もういいや虚で）が殴りかかってきた。

「ちっ」

俺は何とか両腕でガードしたが吹き飛ばされてしまった。

ちっどんだけステータス上げんだよ……。

気付くと壁に叩きつけられた俺に虚は右腕を振り下ろそうとしていた。

「糞がこんなところで死ねるかよ……！！」

突然、力が湧いてきた。体の中の霊力が増加していくのを感じる。
俺は思い切り霊圧を放つ。

ビリビリビリビリ。

周りの空気が変わる。

振り下ろされた虚の腕は俺の霊圧により弾かれた。

「うわぁっ！？　何だよこれぇ！？」

虚は一歩後ろへ下がる。
俺は直ぐに立ち上がり、反撃を開始する。

「おぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

叫びながら走っていると脚にも変化が。
膝にあたるとこから新しい刃が伸びてきた。

ん～エッジニー、とでも呼ぼうかな。

「うわぁぁぁぁ！？」

何か急にビビり始め、右腕をブンブン振り回してくる虚。……やっぱコイツ生粋のやられキャラだな。

俺は急に（てかさっきから）ヤツの動きが遅く見えるようになった。
俺は迫り来る拳をくぐり抜け、エッジニーを虚に向けながら跳躍す

る。

「カットバックドロップターン！」

俺は言いながらエッジニーを突き立て虚の頭を目指す。バックもターンもしてない。つまり言ってみたかっただけ。

ザッッッンッ。

俺のエッジニーは虚の脳天を貫いていた。

「ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！？」

虚は悲鳴を上げながら消えて行った。

すると俺の空腹感は無くなり、霊力の増加も感じる。これが魂の吸収、か。やみつきになって普通の虚みたいにならねえようにしないとな。

ふぅ～どっこいしょ。疲れた。見るとエッジニーも引っ込んでいた。

うん、俺頑張った。自分を誉め、俺は座り込んだ。

第二話　京都に行こう的なノリで（後書き）

何か短い、と反省しています。
１話１０ページとか書いてる方達、マジ尊敬です。
次回はもっと原作キャラ出そうと思います。

では。

第三話　大切なのはイメージ（前書き）

どうも作者です。
ループ＆ループカッケェとか思いながら小説書いていました。・・・
関係ないですね、スイマセン。
今回は新たな原作キャラが出ます。
ではどうぞ。

第三話　大切なのはイメージ

「ふぅ～危なかった～」

俺は虚を倒し、少し休んでいる。

「ん？」

「ひっ……！？」

忘れてた。そういや俺、整（プラス）が虚に襲われてるとこに割り込んだった。何か腰を抜かしているようで座りながらこちらに恐怖の眼差しを向けている。

「いや、安心しなよ。俺は虚しか襲わないよ」

「……っ！？」

取り敢えず落ち着いてもらおうと思ったが……まあ当然無理か。

居ずらくなってきたので俺は移動しようと立ち上がると、

「い……嫌ぁぁぁぁ来ないでぇぇぇぇ」

襲われると勘違いしたのか盛大な悲鳴を上げられた。……何か傷つく。

「いや、待て落ち着「あっお前はあの時の！」……ん？」

突然声がしたので声が聞こえた方を見ると……一護か。

「テメー今度は整を喰おうとしてんのか！」

「いや、ちげーよ」

ん～何か誤解されてるし、

面倒だ逃げよ♪

思った事は即実行。俺の行動は早い。

「アバヨォォォ代行ぉぉぉその整魂葬してやれよぉぉぉ！」

ターン&ダッシュ。戦略的撤退。俺はソッコーで逃げる。

「あっテメッまたっ……ちくしょう！」

何か怒鳴っているが今回は大丈夫だろう。あいつ死神だし、魂葬も仕事だし。整を魂葬しないで俺を追っかけて来ないだろう。……仮に来ても撒くが。

暫く走ってから見ると一護はいない。よし、と思っていると、

ヒュッ。

突然俺の前に何か飛んできた。

「おおうっ！？」

俺は慌ててかわす。

パァァァン。

見ると俺の居た所に青く細い棒状のものが刺さり、地面に小さなクレーターが出来る。

（うわっこれ絶対アイツだ……。取り敢えず撤かねえと）

俺は大体の検討がついたのでさっき青いのが飛んできた方向と俺の間に障害物を作るため、近くの民家の屋根に跳び、直ぐ降りる。そしてそのまま逃走。

「ちっ仕留められなかったか……」

それから暫くして俺は今、子供達が遊びまわっている公園にて休憩中。
天気がいいので日光浴をしている。うんいい昼だ。こんだけ人が居ればアイツも狙ってこれねぇだろ。
……人として問題があるだと？　しょうがねえじゃん俺虚（ホロウ）だし……。

「パスしろパス！」

「シュートおぉぉ！！」

俺の目の前では小学生達がサッカーをしている。

暫く観戦していると、

「おー夏梨来たか！　お前も混ざれよ」

少年Ａ（勝手に命名）が手を振っている。その視線を追うと……黒崎一護の妹、黒崎夏梨発見。

暫く見ていると何故か目があった。するとどんどん夏梨の顔が青くなっていく。

あれ？　そういや夏梨は見えるんだっけ？　やばくね？

すると案の定、

「なっ……！？　お前ら！　早く帰れ！」

必死に少年達に呼びかける。

「は？　何でだよ～せっかく誘っ「いいから早く」……痛っ！　げんこつすんなよ！」

「いいから！」

「ちっ何だよせっかく誘ったのに。行こうぜー」

げんこつされた少年Ｂ（勝手に命名パート２）が周りに言うと少年達は帰っていった。

残されたのは俺と夏梨だけ。夏梨が警戒しながらこっちに近づいて来た。

「ねえ！　アンタらは一兄の何なの？」

「えっと……まああれだアレ。そうアレ」

取り敢えず一護のために代名詞だけで誤魔化そう。つかこの口振りは原作三巻後かな？

「は？　ちゃんと答えろよ！」

「いやだから「疾ッ」……おおっと」

ちっ、子供達が居なくなったから（1人いるが）ついに仕掛けてきたか。

ヒュッヒュッヒュッ。

続けて3本青いのが飛んでくる。

キンッキンッキーン。

俺は全部爪で叩き落とす。

まあ、いいタイミングかもな。

「おい！　早く逃げな。
ここは危ねぇぜ」

「……っ。ちっ」

夏梨にも青いのが見えていたのか去って行った。

さて、

「出て来な！滅却師（クインシー）」

辺りには気配を感じる。アイツは居るだろう。

「へぇ子供を盾にするのかと思ったけど逃がすとはね。それに滅却師（クインシー）を知っているのか。中々博識だな」

予想通り現れたのは滅却師（クインシー）石田雨竜。一護からエスケープした時に飛んで来たのは恐らくこいつの矢だ。

「全くずっとつけて来やがって」

「当たり前だよ。君みたいに大きな霊圧出してれば捜すのは容易い」

やっぱ俺って結構霊圧出してんだ。トリップした時の補正か？　まあいいや。

「なあ？　もう追っかけないでくれね？　もうこっちは死神で手一杯なんだよ。お呼びじゃねーんだ。はい解散」

「そうはいかない」

ちっ駄目か……。
なら、
「少し寝てもらうぜ」
「君には滅却されてもらう」
当然殺す気はない。少し気絶してもらうだけだ。それに俺、結構石田気に入ってるしね。まあ一番は一角さんだけど。
「疾ッ」
ヒュッ。
余計な事を考えていると早速矢が飛んできた。
「おっと」
取り敢えず少し体を横に動かしかわす。それにしてもＶＳ虚から俺の動きは良くなってるな。我ながら感心。
「疾ッ！」
ヒュッヒュッ。
くそ。一々雑念が。
キンッキンッ。

今度は叩き落とした。

「一気に決める」

俺はＶＳ虚の時の感覚を思い出し、両膝からエッジニーを伸ばす。
大切なのはイメージだって誰かが言ってた気がする。

「……っ疾ッ！！」

俺の変化に気付き（当たり前か）少し表情が険しくなる石田。

ヒュッヒュッヒュッヒュッヒュッヒュッヒュッヒュッヒュッヒュッヒュッ
ヒュッ。

うわっ何かメッチャ飛んできた。

だが十分な動体神経と４本の刃を手にした俺には、

「当たるかぁっ」

キンッキンッキンッキンッキンッキンッキンッキンッキンッキンッキンッ
キンッ。

俺は四肢の刃ではじきながら石田に一気に接近する。

「くっ……」

石田の目の前まで行くと石田は諦めずにこちらに矢を向ける。
だが、

「遅ぇ」

俺は石田の背後に回り込み、少し加減して後頭部を叩いた。

「うっ……く、そっ……僕はこん……なと……」

ドサッ。

石田は悔しそうに倒れた。

俺はエッジニーを引っ込め、ピースを作り、

「勝ォーーー利！！！」

何か言ってみたくなった。

どうやって長い爪あんのにピースしたかって？　俺の爪はＸ－Ｍ〇Ｎの主人公みたいな感じ（しまえないけど）だからピースなんて余裕……え、どうでもいい？　……ゴメン。

さて、もう少し勝利に浸ってんものいいが一護が来るかもしれん。

早急に立ち去らねば。

「（じゃあな石田。たくましく生きろ）」

と心の中で気絶している石田を応援し俺はその場を離れた。

第三話　大切なのはイメージ（後書き）

どうでしたか？
石田君のキャラが少し違うような気がしますがスルーしてください。
ちなみにこの時の石田君はまだ一護に喧嘩を売ってません。　次回も新たな原作キャラを出します（予定）。
では。

第四話　話せばわかる（前書き）

どうも作者です。
或る街の群青カッケェとか思いながら小説書いていました。・・・
関係ないですね、スイマセン。
今回は少し短くなりました。・・・スイマセン。

ではどうぞ。

第四話　話せばわかる

「平和が一番だ」

俺は今久々に平和な一時を堪能している。
石田と戦ってからは、一護に続き石田からも追われる日々となった。
そこで俺はどうしようかと悩んでいたところ、まず彼らがどうやって俺を探し出しているのか考えた。

ズバリ霊圧だ。

どうやら俺は結構霊圧が出ているようで、伝令神機や霊絡を頼りに追われている。
なのでそれらから逃れるためには……そう、霊圧を抑えればいい。
という結論に至った。

それからというもの俺は霊圧を抑えるための特訓を襲われたり、食事をしたりする中で、僅かな暇を見つけては行っていた。内容は霊圧を抑えるために霊圧のコントロールの練習だ。

そして俺はついに自身の霊圧を２０％くらいまで抑えることに成功した。やっぱ大切なのはイ（ｒｙ

「やっぱ平和が一番だ」

つー訳で今俺は誰にも襲われない一時を川原の土手で寝転びながら堪能していたが……。

「おいあれ虚じゃねーか？」

「……本当だ」

「困りましたねぇ。今から粗悪品の回収に行かなきゃなのに」

……うっ見つかった。
しかもこの声は……。
「店長ぉ～コイツぶっ飛ばしていい？」
「んー……早く回収したいんで手短によろしくッス」
「……わかりました」
改めて、上から、ジン太、浦原さん、雨、まだ喋ってないけどテッサイさんの浦原商店メンバーである。さっきのやり取りから恐らくコンの件で出て来たんだろう。
いやいやいやいやいやいやタイムタイムタイムタイムタイムタイム。
一護や石田ならともかく、浦原さんからは逃げ切れる気がしない……。
どうする。話してみようか。
「待て話せばわか「ジン太ぁぁホームランッッ！」……お願い待ってぇぇぇぇ！」
ブオォォォォォン。
俺は何とかジン太の攻撃をかわし、必死に叫ぶ。
「浦原さぁぁぁぁぁん！　助けてぇぇぇ！」
「……排除します」

シュババババババッ。

今度は雨の拳の嵐。

「やめてとめてやめてとめてやめてとめてやめてとめてやめてとめてぇっ！」

俺の頭を正確に狙ってくる雨のジャブを全力で叫びながら、頭を振り、ジャブをかわす。

「はて？　……ジン太、雨。一旦止めなさい」

「え～何でだよ～」

「……わかりました」

ふぅ助かった（一旦）。

俺の思いが通じたのかとめてくれた浦原さん。ジン太は渋々、雨は素直に止めてくれた。

「雨、彼は危険スか？」

「……いえ。霊圧は抑えていますが結構高いです。でも危険な感じはしません」

おお、いい流れだ。ハイスペックな改造魂魄雨さんと浦原さんに感謝。

「ん～……。虚サン、さっき話せば何とかって言ってましたけど、何かあるんスか？　まあ最もアタシその場しのぎの嘘で虚を見逃す程甘くは……」

これは解答によっては助かるかも。間違えれば死ぬだろうけど……。

「ああ。まあ信じて貰えるかはわかんないけどな」

「わかりました～。ではアタシ等も急いでるんで、後ほどお話しできますか？」

「ああ……。わかった」

「じゃあ今日の夜浦原商店まで来てください。それと、もし来なかったら危険と見なしてどんなに隠していようと霊圧探って昇華させるんで、そこら辺よろしくッス。後、アタシ達が居なくなった途端虚サンが整（プラス）や人間を襲ったり、後のお話が本当にくだらないお話でしたら……。では後ほど」

「……はい。わかりました」

恐っ。つい敬語になっちまった……。

こりゃ行かない訳にもいかないな……。

浦原さん達は走り去って行った。

……ひとまず助かったぁ……。

浦原ｓｉｄｅ

（それにしても変わった虚でしたねぇ）

と走りながら先程遭遇した虚について考える。

雨が言うには危険ではないみたいですし、霊力も高いのに戦わず、それどころか助けを求めて来た。

あきらかに普通の虚じゃない。

「（色々と興味深い虚スねぇ。放って置いたのは少し不安ですが、あれだけ釘を刺して置けば大丈夫でしょう……と、この件は取り敢えず置いておきましょう）」

「さあ急ぎますよ。今ごろうちの粗悪品が何か問題を起こしているかもしれません」

「「「はい（おう）」」」

まず今は目の前の仕事を。

さっきの虚の件について少し考えながら、改造魂魄の入った黒崎サン目指してスピードを上げ、アタシ達は走って行く。

「（それにしても最近は本当に色々な事が起きる……。これももしかすると……）」

第五話　センスとナンセンス（前書き）

どうも作者です。
リライトカッケェとか思いながら小説書いていました。・・・関係ないですね、スイマセン。
今回は戦闘なしです。
ではどうぞ。

第五話　センスとナンセンス

辺りは暗くなり、夜が近付いて来た。
まだ沈みきっていない太陽を見上げながら、俺はそろそろ、と思い浦原商店を目指す。

しかし……、

「浦原商店ってどこにあんだぁぁぁぁぁぁ！」

という訳だ。
ＢＬＥＡＣＨのＲＰＧゲーム、『放たれし野望』で空座町の地理を一時は大まかに掴んだが、クリアする前に売ってしまいそれから全くやらなかったので忘れちまった。

つまり『迷子』だ。

「くそっ……。ちゃんと道訊いとくんだったな……」

……やべえ。このままじゃ浦原さんに消されちまう……。
やっと、『虚になったからにはカッコいいヴァストローデになるまで頑張ろう！』と前向きな思考に切り替えれたのに……。

……マジでどうしよう。

俺はその後暫く色々なことを思案しながら空座町の住宅街をさまよっていた。

「……やばい！？　急がねえと！」

辺りはいよいよ日が沈み暗くなってきた。

するとその時、

ヒュウウウウ……。

「ん？」

何かが飛んでくる音が聞こえた。

ベチャッッ。

飛んできたソレは、俺の目の前の地面に落ちると赤い液体をぶちまけた。

「これは、まさか……」

これが何なのか理解した俺は、次に写るものが『消します♪』的な内容じゃないことを祈った。

ドロッ、ズッズズッ……。

そして『（浦原）』という文字が浮かび、赤い液体が文字になっていく。

内容は、

『道がわからないのならこの文字に記す通りに進んでください……』

ふぅ取り敢えず『消します♪』的な内容じゃないようなので一安心。

『……現在地から真っ直ぐ８０メートル進み、右に曲がり２０メートル……（略）……で行くと右に浦原商店があります……』

道案内は助かる。これで首は繋がった。

『……あと、このメッセージを見てから１０分以内に来なかったら消します♪…』

・・・やべえ急がねえと。

「（それにしても本当にダイイングメッセージみたいだな。一護と井上の気持ちも理解できるけどツッコまねえ。堪えろ俺！）」

……口にさえ出さなけりゃあ俺の勝ちだ！

『P．S．

今、これを見て

「ダイイングメッセージみたい」

とかありきたりな事を思った人は、

ツッコミの才能がないです。更には言わせてもらうとその事に思考を割くなんて時間が勿体無いですよ（笑）』

「……なっ……。（笑）にここまで殺意が湧いてくるとは……。浦原、ぜってぇぶん殴っ……ムリですね、わかります」

わかった人もいると思うがこれは一護達を浦原さんが召集した時のダイイングメッセージっぽいやつだ。わからない人はＢＬＥＡＣＨ七巻を見よう。

……それにしても殺意って恐怖には勝てねえもんだな。……ちくしょう。

……取り敢えず急ごう。

俺は自身を鎮め、指示通りに浦原商店へと向かった。

俺は浦原さんのメッセージ通りに走り（時間がなかったから）浦原商店に着いた。

ガラガラガラガラッ。

俺は浦原商店の戸を開けた。……入り口が小さくて入れん。仕方ないので霊圧をかなり抑え、体を小さくして中へ入る。つーか結構小さくなるもんだな。

「いやぁ～虚サン。待ってましたよ。危うく消し……いや、何でもないっス」

入るとすぐ浦原さんが出迎えてくれた。今絶対、消してしまうところでした的な事を言おうとしてたなこいつ。この野郎マジでぶっ飛ばしてやろうか……無理か……。

「……道案内はマジ助かった。危うくアンタに消さ「そうでしたか。もしかしたら道わかんないんじゃないかって思いまして。無事に来れてよかったっスねぇ」……」

聞け！俺の僅かな反撃を……。

「ああ、そういえば話したい事があるんスよね。え～と……虚サンじゃあれなので名前を訊いても言いスか？」

「えっと……」

名前か。どうしよう。
元の名前は思い出せないし……。うーん……自分で新しくつけるか。
虚っぽい名前は……、

「……アルコ・バ・レーノだ」

はい、俺のネーミングセンスぅぅ！所詮俺のネーミングセンスなんてこんなもんだよ、ハイ。
ちなみにこの名前はわかった人もいると思うが（……このフレーズ二回目）、某マフィア漫画から頂いた。我ながら適当だな。うん。

「アルコサン、スね？　アタシの一存でアルサンと呼ばせてもらうっス」

「ああ、構わねえよ（どうでもいいけど何か理科で出てきそうだな、アルコ酸）」

「ではアルサン、此方へ」

「ああ」

俺は浦原さんに案内され、茶の間へと向かった。

「さて、アルサン。まずアタシが訊きたい事はアナタは何なんですか？ってことっス。虚の割には整（プラス）を喰った感じもないですし、理性もキチンと持っている」

時折浦原さんの表情がシリアスになる。
ちなみに今浦原さんと話していて、他にこの場にいるのはテッサイさん。子供達は参加させないらしい。

「あ～まあ簡潔に答えると俺は虚だけど虚じゃないってこと」

「といいますと？」

とテッサイさんが訊いてきた。

「俺は整から虚になった訳じゃないってことだ」

「ん～つまり普通の虚じゃないってことスね？　何か地獄に行きそうになる事でもしましたか？」

「ああ、そうだ。整から虚になったとかじゃなくて、気付いたら突

然虚の体に自分の意識があったって感じだ。後俺は健全な男子だ」

「……」

暫しの沈黙。……何だ？　俺なんかすべったか？

そんなどうでもいい事を考えていると暫くして、

「わかりましたぁ。取り敢えずアルサンについて調べてみたいんスけど……構いませんか？」

と浦原さんが訊いてくる。

調べるって何すんだ？

「調べるって何すんだ？」

思った事をそのまま口にした。

「何、簡単です。アルサンの皮膚を少しもらい、アルサンの霊圧を分析するだけっス」

皮膚を少し……か。ちょっとグロいし痛そうだけど、すぐ切り口を塞げばいいか。

「わかった」

俺は返事をすると直ぐに爪で左腕の皮膚を薄く切る。

スッ。

痛え。だけど直ぐに切り口に霊圧を集中させ、傷を塞ぐ。

「これでいいのか？」

「充分っス」

切った皮膚を浦原さんに渡す。

「さぁて早速調べますか。ではアルサン、検査の結果は解り次第報告しますんで」

「りょーかい」

「それでは」

「ああ、頼むぜ」

浦原さんとテッサイさんは奥に消えてった。

さて、俺も出るか。

俺は浦原商店から出て空を見上げる。空は夜空になっていた、星がキレイだった。

（星がキレイだと思ったのも久しぶりだな）

そして少し離れた所で虚の霊圧を感じた。

「おっ虚だ！邪魔（一護、石田を指す）がいなければ、ディナーだな」

俺は虚の霊圧をたどい、走り出した。

第五話　センスとナンセンス（後書き）

どうでしたか？
熱がある状態で書いたので変な所があるかもしれません。
あと、アルサン＝アルさんです。わかりずらかったと思うので一応書いておきます。浦原さんは～サンと言っているので。
できるだけ更新遅れないように頑張りますが遅れるかもなのでご了承ください。

長くなりました。では。

第六話　おやつの時間（前書き）

どうも熱が下がってき作者です。
ワールドアパートカッケェとか思いながら小説書いていました。・・・
・関係ないですね、スイマセン。
今回は一部原作のまんまです。

ではどうぞ。

第六話　おやつの時間

「くそっ！　数が多すぎる」

俺の周りにはたくさんの虚。

ザシュッッ。

ザッッッ。

俺に迫ってくる虚を切り裂き、貫く。

だが、どんなに倒しても虚達の数は大して減らない。

「ガアァァァァ」

「グオォォォォォ」

耳に響く虚達の叫び。

何でこんな状況に置かれているかと言うと……、

■■■■■■■■■■■■■■■■■■

「はぁ～どっこいせっと」

ある日の午後、今俺は浦原商店の茶の間で休憩している。
浦原さんと話をしてから数週間経っている。
あれから俺は浦原商店に出入り自由となった。
入る度にジン太に絡まれるが……。

今日はテッサイさんに茶を頂いた。魂以外は腹の足しにはならないが、味覚はあるので、茶菓子とともに頂いた。
茶を飲む度に俺が元居た世界を思い出す。
その度に、俺何でこの世界に来たんだろう、と思う。

ガラッ。

茶の間で寛いでいると戸が開く音がした。
ジン太かな？　ジン太なら出て、迅速におやつを渡さないとジン太ホームランの刑が待っている。

俺は急いで茶の間を出る。

「おや、朽木さんじゃないスか！何か用スか……あうッ」

俺が店の方へ行くと浦原さんの頭に伝令神機が飛んだ。

このシーンは……、

「なにが何か用スかだ！」

ルキアさん登場。このシーンは確か……そうだ！　今日ついに石田が一護に喧嘩売んのか。

「貴様が何度かけても応答せぬからこちらから出向い……浦原、何で貴様の店に虚が居る？」

やべっ！つい出て来ちまった。

「いや待て、黒くて両腕に長い爪……どこかで聞いたような……」

暫くルキアさんはうなりながら考えていた。

「あっ貴様！　もしかして一護が言っていた妙な虚か！　……して、浦原。こいつが何で此処に居る？」

「彼はアルさんと言って虚しか喰わない虚なんスよ！　アルサンはちょっと訳ありでしてね。今日は茶を飲みに来てました。アルサン、彼女は朽木さんっス。アルサンがいつも撒いているって言っていた黒崎サン。あれの指令みたいな人っス」

「浦原。そいつは大丈夫なのか？」

「問題ないっス！　おかしな素振りを見せたら消すって言ってあるんで」

まだその話あったんだ……。

「むっそうか。私は朽木ルキアだ。一護がいつも世話になっている」

「アルコ・バ・レーノだ。アルでいいや。一護にはいつも世話になっている」

「色々訊きたいが、今日は浦原に訊きたい事があって来た。浦原、滅却師について何かしってるか？」

「……滅却師……久し振りに聞いたっスねぇ……」

その後滅却師についてのくだりがあった。

「……ん？……」

「……どうした浦原？」

「……」

ピピピッ。

「！」

ルキアの伝令神機がなった。

「くそっ！　虚か！！こんな時に！　すまぬ浦原！　続きはまた……」

ルキアが出て行こうとする。が、

バチッ！

伝令神機からノイズのような電子音が発せられる。

「反応が消えた……？　もう……？　何だ…一護の奴めえらく手際の良い……」

ピピピッピピピッ。

「！？　また……！？」

バシッ！

またノイズのような電子音が。

「……また消えた……。何なのだ！？　まさか本当に壊れたのでは……」

ピピピ。

「……またか。やはりいかれてしまったようだな。こんなペースで虚が出てくる事など有り得ぬ事……」

ピピーッピピピッピピピッピピピッピピピッピピピッピピピッ。

狂ったように伝令神機が鳴り響く。

「虚だな。しかもかなり多い」

たくさんの虚の霊圧を感じたので言ってみた。

「浦原さん、俺行って来る。バランスがどうとか言ってた矢先だが、

虚を減らさねえとな」

浦原さんに一言告げると俺は浦原商店を出て行った。

さて、おやつの時間、かな？

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

んで今に至る。

一体虚が飛び出して来た。

「くそっ」

俺は悪態をつきながら虚を迎撃しようと構える。

その時、

「疾ッ」

ヒュッ。……グサッッ。

青い矢が飛び出して来た虚の頭を貫き、滅却した。

「やあ、いつかの虚君。いつも思うが君の霊圧は相変わらず馬鹿みたいデカいね」

「石田」

石田だった。

「何故お前が？」

「勘違いするな。僕は君を滅却(ころ)すと決めた。だから君にはこんな雑魚の群れにやられては困る。それだけだ」

こりゃ完全に目ぇ付けられてるな……。でも、

「ああ、援護感謝する」

石田が居ればエッジニーを出すまでもねぇな。

「よし、じゃあいっちょデザートタイムと行きますか！」

ザグゥゥゥゥッ。

言いながら俺は近くに居た魚ヅラした虚の頭を爪で貫く。

「ギャァァァァ……」

魚ヅラは消え、俺の霊力の一部となった。

「疾ッ」

ヒュッ。ザグゥッ。

「ギュルァァ……」

振り向くと俺に噛みつこうとしていた虚が石田によって滅却されていた。

「サンキュ」

「だから勘違いするな！」

ヒュッヒュッヒュッ。

ザグゥッゴシャッズシャッ。

すげー。どんどん虚が減ってる。

俺も負けらんねぇな。

俺は虚の群れの真ん中に跳ぶ。

「うらぁぁぁっ！」

そこから爪をぐるりと周りながら振るう。

「ローリングバスターライフルぅぅ！　ざまぁ！！」

バスターライフルでなけりゃあビームも出ない。言ってみたくなった、ただそれだけ。

今ので一気に五体は消した。俺の霊力にバブル期が！

「……無茶苦茶だね」

呆れながら石田は虚を滅却していく。

虚の群れを消すのにはそう時間はかからなかった。

さっきの戦場には、霊力のバブル期で元気いっぱいな俺と、少し疲れた様子の石田君。

「さて、何時までも君と居ても仕方がない。僕はもう行く」

「ああ、わかった」

「それからまだ名乗って無かったね」

そういえば確かに。

「石田雨竜。いづれ君を滅却(ころ)す者の名だ覚えておけ」

「俺はアルコ・バ・レーノだ。覚えて置いてやる。じゃあな石田。テメーも死ぬなよ」

「ふん。僕は君に心配される程やわじゃない。それじゃあまた会おう、アルコ・バ・レーノ」

そう言うと石田は去って行った。

第六話　おやつの時間（後書き）

どうでしたか？
ルキアさん登場。そして一護が空気になってきました。
一護より石田のが目立ってますねこの小説。本編では主人公なのに・・・。
次回も空座町虚ハザード編です。
では。

第七話　基本的人権の尊重（前書き）

どうも風邪と戦闘中の作者です。
遥か彼方カッケェとか思いながら小説書いていました。・・・関係ないですね、スイマセン。
今回は原作のおまけみたいなところを参考に書きました。

ではどうぞ。

第七話　基本的人権の尊重

石田と別れ、俺は暫く走っていると虚の群れが一点を目指して移動していた。数は４体。

……虚が集まってる。メノス登場か？　……いやまだ早え。

取り敢えず霊圧を探ってみる。

虚達が向かっている先はっと。……この霊圧どこかで……。あ！

確か夏梨だ！！

どうやらチャドはもういないみたいだ。

チャドが居なくなった後の夏梨の行動は確か原作では……ああ、あれだ。夏梨がヒゲ親父（一心）をチャドの看病をさせるために連れてきて、チャドが居なくなってるって感じだったな。んでその後、ヒゲ親父（実は強いお父さん）が壮大なポジティブシンキングを発揮して、夏梨にシメられる、だったな。

やべえな。花梨達無防備だな（ヒゲは必要な時しか本気を出さないみたいだし）。

つーことで俺は虚の群れが夏梨達の所へ到達する前に消そうと虚の群れを追う。

「何だかこのサイズを維持するのも大変になってきたな」

俺は今、今日だけで急激に増えていく霊力を抑え、相変わらず3メートルくらいで保っている。

さっきの虚の群れは？って？

ああアイツ等は大して苦もなく喰った。大体の状況は以下の通り。

まず最後尾の虚をロックオン。某ステルスアクションのように足跡を消しながら（霊圧も最大まで抑えながら）、最後尾の虚の頭目掛け爪を突き刺す。

グサァッッ。

「ゴワァァァァ……！」

よし、まずは一匹。

「ギルルルルッ！」

「グオォォォォォ！」

「キシャアア……」

仲間が1人減った事に気付いた残りの三体が臨戦態勢に入る。それに合わせ、俺は今の体長を維持しながら少し霊力解放！　久し振りにエッジニーを展開。

ちなみに臨戦態勢に入った虚の内、一番最後に叫んだやつは叫んでる途中で消しました。

「さて、太らないように頂くか」

言っていると一体虚が噛みつこうと突っ込んで来た。

ザシュッッ。

それに合わせエッジニーで虚の頭にカウンター。悲鳴を上げる間もなく虚は消えていく。

「グオォッ……」

残りの虚が絶句していた。

「グオォォォォォォォッッ！」

しかし腹を決めたのか某火竜のような、先端が太くなっていてそこから棘が伸びている尾を、鎌のように振ってきた。

「おわっ……！？　危なねっ！！」

俺は跳躍し、かわす。
そしてそこからの、

「カットバックドロップターン！！」

バックもターンもし（ｒｙ
ただ言ってみ（ｒｙ

俺はエッジニーを虚に向けながら急降下。

ザッッッッ。

「グオォォ……」

虚の頭を貫きながら着地。
俺が着地するころには某火竜風虚は消えていた。

（部位破壊報酬出んのかな……）

イカンイカン！　何を考えているんだ俺！！

という感じだ。
これでまあ夏梨達は問題ないだろう。多分。

さて、俺もそろそろ一護達の方に行くか。何か石田の霊圧と一護の霊圧が同じとこに感じるし。恐らく今頃背中合わせイベント発生してんじゃねぇかな。

「一丁行くか！」

俺は一護達の霊圧目指して走り出した。

「おや～、アルサンじゃないっスか！」

「おお、俺様の下僕二号じゃねぇか！」

一護達の方へ向かっている道中浦原一行と遭遇した。
つーかジン太。その呼び方やめれ。

「おっ浦原さん」

取り敢えず返しておく。

「アルサンも黒崎サンの所へ？」

「ああ、いよいよ虚達も一護達の方に集まって来てるからな」

さっきから虚達の霊圧が一護達の方へ集中してきた。早くしねえとメノスが来るな……。

「いやぁ奇遇っスねぇ！　アタシ達も黒崎サン達の方に向かってるんスよ！」

「みたいだな。急ごうぜ早くしねえとメノスが来る」

「……わかりますか。確かにメノスが来ますね。急ぎましょう」

併走しながら喋っていたので、一護達に近付いてきた。

「ん？　なんだあの人達？　……何かの劇団の人達か」

おっケイゴだ。確かこいつも現場に居たな。まだ俺のことは見えてねえようだが。

ケイゴは直ぐに見えなくなった。

「黒崎サン達っス！」

遠くに一護達発見。
天を見ると、

バシッバキバキバキバキ。

メノスが顔を見せた。
焦る一護と石田。

「雨」

「……わかりました」

浦原の一言を合図に、御札のような物が貼りまくられている筒を構え、雨は筒から弾を発射させる。

ガガガガガガガ。

一護達の周りにいた虚達は弾丸の嵐を浴びせられる。

「「！！」」

「……こ…こんにちは……」

突然の援護に驚く二人とお辞儀をする雨。

「黒崎サーーーン！　助けに来てあげましたよーーーン♪」

「てめえは……ルキアの知り合いのゲタ帽子！？　……あ！？　てめっあの時の妙な虚！」

浦原さんがキメる。そして一護達が俺に気付く。

「先刻ぶりだね。アルコ・バ・レーノ」

石田が声を掛けて来た。

「ああ、だな。だが話は後だ」

見ると雨、ジン太、テッサイさん達は暴れている。

俺も暫くは腹減らねえよう喰わねえとな。

俺も虚の群れに突っ込み、爪を振り回す（ちなみにエッジニーはしまっている）。

「オラオラオラァァァ！」

俺は近くの虚をガンガン切ってく。

バッガァァ。

ガガガガガガガ。

ゴパッ。

ズバッ。

「ガァァァァ……」
「ゴァァァァ……」
「キァァァァ……」
「クシャァァァ……」
聴こえるのは一方的な暴力の音と消えゆく虚達の悲鳴。
虚達の殲滅は数分もかからなかった。

さて、全部片付いたし一護達でも見てるか、と座り込むと、
ガガガガガガガガガガガガガガ。
虚達はいねーのに鳴り止まない銃声。雨、そんなにストレスが溜まっているのか……（恐らくジン太のせいだな）。
筒を乱射している雨の横では、
「おいウルル！！　もう終わりだ！　全部片付いたぞ！　きーてん

のかウルルてめえ！！」

ジン太が止めようとしている。

スチャ。

ん？　スチャ？

何だろう？雨がこっちに筒を向けてるように見える。疲れてんのかな、俺……。

ガガガガガガガ。

「おわっ……！？　タンマっ！！」

気のせいじゃねえ！！　何かものっそい飛んで来る。

やめれ。マジで死ぬから……。

「イィィィヤァァァァア……！！」

俺のこの必死な回避劇は数十分程続いた。しかも何故か途中からジン太も参戦。

「確かにまだ残ってたな」

とか言ってきた。

確かに俺虚だけど……。

改造魂魄２人は洒落にならん。

……俺の扱いって……何？

第七話　基本的人権の尊重（後書き）

どうでしたか？
夏梨達は何故あの後虚に襲われなかったのでしょうという作者の疑問から今回の話が生まれました。
では。

第八話　思ったことは即実行（前書き）

どうも、サード発売決定によりテンション上がってきた作者です。
ブルートレインカッケェとか思いながら小説書いていました。・・・
関係ないですね、スイマセン。
今回は割とシリアスです。

ではどうぞ。

第八話　思ったことは即実行

あの後結局原作通り、一護がメノスを撃退、一護の為石田頑張る、で終わり。

まあ全部浦原さんから教えてもらったことだが……。俺には一護達を見ている暇なんて与えられなかった…（理由？一話前から察してくれ…）。

……俺？　元気だよ？　何とか…。

空座町虚ハザード編の翌日、俺はいつもの土手にて休憩中。

しかしこの土手は何かいつもゆっくりできないという不思議な場所であり常に、厄介事に巻き込まれる、というフラグが立っている。

つまり例に漏れず、俺はゆっくりできない。

「お！　居た！　目標の虚発見！」

この声は…、

「黒で両腕に長い爪。報告通りだ。コイツで間違いないみたいだね、一角」

「さあて、派手にいくか！」

一角さんんん！！後変態オカッパナルシストもいる。
でも何でだ？

俺は一旦起き上がる。

「おい、そこの虚！」

「あ？　俺か？」

「そうだテメーだ」

確かに今日死神が来るイベントは発生する。だけど来た死神は阿散井と白哉だけだった筈。

実際にこんな間近で一角さんに会えたのは嬉しいが、……嫌な予感しかしない。

「……何の用？」

「てめえを排除しろと上から言われたんでな。悪いが消えて貰うぜ」

待て待て待て待て待て待て！？

何故に？

「何故？って顔しているね。いいだろう教えてあげるよ」

と弓親。

「君は報告だと虚だけを襲うみたいだね。変わっているけど、ソウルソサエティ側は仮にも虚だし放って置くわけにもいかないみたいだ。それに君、昨日のメノス騒動の時に随分と虚を喰ったそうじゃないか？　霊力的にも極めて危険だと判断されているんだよ、君は」

「それで、ある程度強力な虚でも対処出来るようにってことで俺達が選ばれたって訳だ」

マジ？　やばくね？　しかも周りの死神は弓親だけだし場合によっては卍解されるかも…。

これは…、

「そっすか。お疲れッス！　じゃ！」

逃げるしかねぇ…。

悪・即・斬ではなく思・即・即・逃。思ったら即逃げる。

俺は全力疾走する。

「結構早えじゃねぇか」

しかし回り込まれてしまった…。

……くそっやるしかねぇか。

「ちっ」

俺は一角さんに向き直る。

「はっ、やる気になったか！　さあ、楽しもうぜぇっ！！」

戦闘開始（不可抗力）だ…。

「ッラァァア！」

キンッ。

一角さんが振り下ろした刀を右の爪で受ける。
すかさず左の爪でカウンター。

ガキッッ。

しかし鞘で防がれる。
そして双方後ろに下がり、距離を取る。

確か一角さんの戦法は両手の刀と鞘を入れ替えながら攻撃と防御をするんだったな。

（片方さえ破壊すりゃあ勝てる）

俺は一角さんの斬魄刀かその鞘を破壊するため、爪に霊力を集中させる。

（よし、いける！！）

「おおぉぉぉ！」

今度はこっちから仕掛ける。
俺は一角さんの方へ駆け出し、爪を振り下ろす。

ヒュッ。

「ちっ」

一角さんは後ろにさがり、俺の爪は空を斬った。ちっ防御してもらえなかったか…。

「ハッァア！」

ため息をつく間もなく、一角さんの頭目掛けた強烈な一突き。

「くっ」

頭を横に動かし避ける。

シュッ。

一角さんの一突きは俺の仮面を掠めながら突き抜けていった。

すかさず反撃に出る。

「っ！」

俺は爪でなぎ払う。

一角さんは後ろに跳んだ。

ザシュッ。

浅いか……。

見ると一角さんの胸から少し血が出ている。

「？」

何で当たった？という表情だ。

「何をしやがった？」

「もう一回喰らえばわかるんじゃね？」

俺は一角さんに近付き、爪を横に振る。

一角さんは後ろに下がりかわすが、さっき程ではないがまた一角さんの胴を俺の爪が掠めた。

「はっ、わかったぜ。てめえ俺に攻撃する瞬間に霊力を爪に集中させて、少し伸ばしたな？」

御名答。常に集中させながら斬っても避けられたんで、少し発想を変えてみました。俺だって霊力と霊圧の扱いには自信がある。

伊達に普段、死神と滅却師を撒いていないぜ。

「なるほど、やるじゃねぇか。なら俺も本気でいくぜ」

と言いながら一角さんは鞘を柄に合わせる。

よし、隙ができた。エスケープ。

「延び「じゃっ」……ああっ！　くそっ」

今度は逃げ切る。一角さんが追いかけるのも少し遅れた。いける！
脚に霊力を集中させ全力でダッシュ。

俺は住宅街に入り、曲がりまくる。
狭い路地に入ると弓親が先回りしていた。

「逃がさないよ」

「うるせぇナルシスト」

俺は地面に爪を刺し、地面の一部を引っこ抜き弓親に投げる。

「うわっ！？」

かなりの質量だったので、弓親は怯む。

よし、今だ。

俺は投げた直後、思いっきり跳躍し、住宅街の屋根に乗り、霊圧をかなり抑えて逃げる。

「くそっ。逃げられたか…。霊圧も消された」

「おい弓親！ヤツは？」

「一角か。逃げられたよ。霊圧も消された」

「そうか……」

俺は浦原さんの所へ向かった。

ガラッ。

「浦原さん、いるか？」

「おやぁ？　アルサンじゃないッスか？　どうしました？」

俺が叫ぶと少し遅れて、浦原さんが出て来た。

「なあ浦原さん。何か俺を狙って死神が来たんだが」

「そうですか…。彼らは何と？」

死神と聞いて一瞬ピクリと動いたが、すぐに冷静になり浦原さんが俺に尋ねる。

「昨日の一件でたくさん虚を喰ったから、霊力が高く危険だからとか言ってた」

「……」

浦原さんは黙り込んでしまった。

「アルサン」

浦原さんの表情が真剣な顔付きになる。

「何？」

「アルサンには話さなくてはいけないことがあるっス」
「？」
「この前、アルサンの霊圧について検査した結果が出ました」
「ホントか！？」
「ハイ」
「んでどーなの？」
浦原さんはふぅと息を吐き、続けた。

「アルサンは確かに虚ですが、アルサンの霊圧の構成は非常に死神近いです。アタシは今まで色んな事研究してきましたが、死神に近い虚なんて異例です」

は？

「アルサンが以前言っていた、虚であって虚じゃない、は正に正しいっス」
「え……？」

これは予想外だ。俺は驚きながら聞いていた。

「アルサン。死神と交戦しましたか？」

「ああ」

「まずいっスねぇ……」

「？」

ｓｉｄｅソウルソサエティ

「隊長。例の虚の体の一部と思われるものをお持ちしました」

「ふむ、十一番隊の野蛮な猿だと思っていたが、仕事はできるようだネ」

「これです。恐らく仮面の一部かと」

「なるほど。わかった。戻っていいヨ」

「はっ」

「虚を喰う虚。実に興味深い。くく、楽しみダヨ。いずれ会ってみたいネ」

第八話　思ったことは即実行（後書き）

どうでしたか？
一角さんは作者的にはアルに逃げ切られる程度ではないと思いますが、都合上ああなりました。スイマセン。

では。

第九話　フラグは立つもの（前書き）

すいません、更新遅れた作者です・・・。
更新してなかったのにお気に入り登録数が三桁になっていて、感謝の気持ちと申し訳ない気持ちで一杯です。ホントすいませんでした&ありがとうございます。

ではどうぞ。

第九話　フラグは立つもの

「……はあ……」

今の俺は客観的に見たら、どんなだろう？　物凄い羞恥を味わい、逆に悟りを開いたような遠い目をしたヤツ…みたいな感じなんだろうな……。

いや別に羞恥を味わった訳じゃねーよ？脱糞したりしてないよ。よーするに何が言いたいかって言うと、

「……憂鬱だ…」

っつーこと。

（何で俺がソウルソサエティにも狙われなきゃならねえんだ……）

昨日のことが頭から離れねえ……。

（もうあのフラグの土手には行かねえ。絶対に）

と一時は誓ったが、あの癒しの空間が恋しくなり、現在進行形でフラグ乱立土手にて休憩している。

俺が癒しを求めている理由は、一つ目は言うまでもなくソウルソサエティに目をつけられたこと。二つ目は昨日浦原さんに言われたこ

とについてだ。
二つ目は別に、最悪だ俺ついてねぇ…って程ではない。ただ、面倒事に巻き込まれそうなフラグだな（さっきから何回フラグって言ってんだよ俺。あ、また言っちまった…）。
タッタッタッタッ。

ゴチャゴチャ考えていると誰かがこっちに走って来る音が聞こえる。
足音からすると3人くらいかな？
なんか面倒事な予感。

「早速虚じゃな。2人共、修行の成果を見せてやれ」
「はい」
「む…わかった」

はいキターこのパターン。聞こえてきた会話の流れから危険な匂いしかしない。
俺はとりあえず身を守るため起き上がる。
見ると俺の目の前には、黒猫（夜一さん）、井上、チャド、という面々がいる。
修行の成果ってことは…ああ、2人共一護について行くための修行中か。

自分の事で一杯一杯だったが昨日の夜にルキアが居なくなったの。

「あの虚、中々できるな。2人共。やれるか？」

実際に見ると猫が喋んのってこえーな……。そして何でこんなオッサンくさい声なんだ？

「はい」

「……問題ない」

うっ……。2人共臨戦態勢に入った。嫌だだるいめんどくさい＝逃げたい。

よし、レッツエスケープ！

あとこのフラグ乱立土手にはもう来ないぞ絶対。

「腹痛が痛いんで勘弁して下さい。じゃっ！」

バカなことを言って即退散。俺は一気に走り出す。

「あっ」

驚く井上。

正直この2人からならいくらでも逃げ切れそうだ。

暫くすると、周りには2人の霊圧は感じなくなった。
さて、これでゆっくりできるなとか思っていると、
「ふむ、中々やるの。オヌシ」
……夜一さんが居ました。気付かなかった…。
それに落ち着いて考えると彼女を撒ける術はない、ということに気付いた。
だって瞬神だよ？　無理じゃね？
しかも猫の状態で追い付かれた……。
「いやぁ早いッすね猫さん」
「まあな」
くそっ。無理だ逃げきれん……。
となると俺の選択肢は、
?.頑張る（何を？）
?.戦う（勝てねーよ）

?:話す（これだな）

?:に決定。

「いやぁ待ってくださいよ」

「お前が喜助が言ってた虚か？」

あり？　知ってたの？

とりあえずこの場を収めようとしたら、少し予想外な言葉が返ってきた。

「え？知ってたの？」

「うむ。アル…だったかの？　大体のことは喜助から聞いておる」

はぁぁぁぁぁぁぁぁ！？

じゃあさっきの俺の休息を返せ！　何で無駄に走ったんだか……。

「じゃあ2人をけしかけないでくれよ……」

「すまんの。少しからか…いや、どれ程か見ておきたくての」

今からかうとか聞こえた気が……。

「さて、とりあえず名乗っておこうか。儂は夜一じゃ」

「あ、ああ。俺はアルコ・バ・レーノだ。アルでいい」

突然自己紹介されたのでとりあえず返す。

「そうかやはりお前がアルか。聞くとお前は死神に近いらしいの」

「ああ、らしいな」

「ふむ……。死神に近い虚か……。昔と真逆じゃな」

昔……ああ、『仮面の軍勢』のことか。

「なあ、それって「あ、いた！」…ん？」

うわっ…井上とチャドか。

……めんどくせぇ。

「ちょっとまっ「むん！」…うわっ」

チャドめ…。問答無用で拳圧みたいなのを飛ばしやがった。

ちっしょうがねぇ。

「夜一さん！また今度話そうぜ。んじゃ」

言って速攻でダッシュ。

何か俺ってこんなんばっかだ……。

逃げオチって感じかな？

とか考えて走っていると2人はもう居ない。今度は夜一さんもいないし、逃げ切ったな。

辺りは夕方。あの後気付くと俺はさっきの所に戻って来ていた。つまりフラグ乱立土手。

（ぜってー来ないって誓ったのにな……）

もういいや疲れた。

俺は何時も通り土手に横になり、芝に身を預けた。

（死神に近い虚、か……）

思ってたより俺の存在はめんどくさいらしい。

（まあいいや。俺はヴァストローデになるまで頑張るだけだ）

とりあえずこの件は置いて置こう。

それよりもまず、

「腹減ったな」

よし、夜になったら虚でも喰おう。
俺はそう決め、夜まで土手にて少し寝ることにした。

暫く経って辺りは静寂に包まれている。

（……夜か）

俺は体を起こし、胡座をかく。

（なんだ？　この霊圧？結構でかいな…。ヒュージホロウクラスか？）

霊圧を探っているとでかい霊圧を感じた。一護はレッスン中だし、行って来るか。
俺はその霊圧を辿り、走り出した。

さっきの霊圧を辿っていると目的地に到着。

（なんてこった……）

目的地に着いて目にしたのはでかい虚だった。
しかし予想していた虚よりもでかく、霊圧もハンパない。

（ヒュージクラスどころじゃねぇ……）

俺の目の前に居るのはこの前見たメノスよりもややでかい。体は灰色で脚はカエルっぽいが鋭い爪が伸びている。腕もかなり太い。更に何か刀を背負ってる。コイツは…、

「破面（アランカル）だ……」

第九話　フラグは立つもの（後書き）

どうでしたか？
今回みたいに更新が遅れることはたびたびあるかもですがこれから
もよろしくお願いします。

では。

第十話　感覚も大事（前書き）

どうも作者です。
ソラニンカッケェとか思いながら小説書いてました。・・・関係ないですね、スイマセン。
修正した結果、前とは展開も変わります。
あと修正遅れて本当にスイマセン。

ではどうぞ。

第十話　感覚も大事

……落ち着け俺。

今俺の目の前にはデッカい虚。

サイズもメノス並み。更に背にはデッカい斬魄刀。つまり破面だ。

さあ、どうしようか…。

「ん？何だお前？」

俺が色々思案していると破面がこちらを見て、話しかけてきた。

「えっと、まあ…」

ズドォン。

「くっ」

俺が適当に何か返そうとすると、破面は殴りつけてきた。俺は何とかそれをかわす。

くそっ今までの虚の比じゃねぇ。

改めて霊圧を探ると、恐らくギリアンクラスか。だが霊圧はデカいだけだ。何となくスカスカな感じがする。

こいつは破面もどき、か。
だが霊圧がハンパないのは事実だ。
まあ、とりあえず戦ってみるか。
「デケェからって調子に乗るなよ」
俺はまず、破面もどきに接近。
あっという間に懐に潜り込むと、跳躍し破面もどきの顎目掛けて爪を突き出す。
（……当たるか？）
俺も爪が破面もどきの顎に届くと思った所で、
「ウゼェ！」
バシィィ。
破面もどきに拳を叩きつけられた。
「ちっ」
俺は半ば想定出来てたので、何とか両腕でガードする。
しかし勢いを殺し切れず、あえなく地面に叩きつけられる。
「ぐっ」
背中が痛えなチクショウ。

俺は痛みを堪えながら何とか立ち上がると、頭上から拳が降ってくるのを確認。
とっさに右に跳ねる。

ズドォン。

一瞬前まで俺の居た所に穴があく。

破面もどきとは言え霊圧はメノス級。
手強いな。くそっ。

俺は着地するとエッジニーを展開。俺の両膝から刃が伸びる。

「ッラァァ！」

そして直ぐさま、地面にめり込んでいる破面もどきの腕にエッジニーを突き出す。
だが、

カキンッ。

刃が通らない……。これがイエロか？

「くそっ」

刃が通らないと分かった俺はひとまず距離を取るべく、後ろに下がる。

「ハハッ！効かねえよ。雑魚が！」

破面もどきごときが……。いい気になりやがって……。
いくらイエロといえど斬れねえ訳じゃない。俺を雑魚だと思って破面もどきは油断してる。今がチャンスだ。
「だまれ破面もどき」
俺は右腕に霊力を集中させる。
よし！　今だ！！
「ウォオラァァァァ！」
俺は踏み込み、破面もどきの前に行くと、溜めていた霊力を右腕を振り上げながら爆発させる。
ズッパァ。
よし、殺ったか？
だが、
「くそくそっ。雑魚程度に傷を付けられるとは」
ちっ浅かったか……。
「もう許さねー。遊びながら殺るつもりだったが、もういい！」

破面もどきは言いながら仮面を剥いだ。
すると霊圧も一層増した。
マズいな…。ヤツがここまでとは予想外だ。
と苦心していると、
「死ねぇぇぇ！！」
さっきの倍くらいになった破面もどきの拳が俺に迫ってきた。
……早い。回避じゃ間に合わん。
とっさにガードするが、そんな事お構いなしに吹っ飛ばされる。
あまりの威力に受け身もとれず地面に落ちる。
（……両腕が痛え）
見ると俺の両腕を折れていた……。
……やべえな。
「まだ生きてんのか」
くそが。破面もどき風情が調子に乗りやがって……。
俺は立ち上がり、脚に霊力を集中させる。……両腕は捨てたようなもんだ。
「うおぉぉぉ！」

そしてそのままダッシュ。様々な敵を撒いてきたスピードで駆け抜ける。

途中、振り下ろされる破面もどきの拳かいくぐりながらヤツの顎まで到達。

「喰らいやがれぇ！」

霊力を込めたエッジニーを突き出す。

ガキンッ。

「何っ！？」

しかし鈍い音と共に、エッジニーが折れてしまった。

「ふんっ」

「ぐはぁっ」

ちっ隙を作っちまった。

俺は破面もどきの右フックに吹き飛ばされる。

やべえなモロ喰らっちまった。

ハハッ体が動かん。

見ると破面もどきが止めを刺すべく近づいて来る。

「……はぁ……」

落ち着け俺。逆にこういう時こそ冷静に。

「……」

集中だ……。

さて、どうするか。

脚は動く。腕は、

「……っ」

キツいな。ならぶっつけ本番で自己再生でもやってみっか。

「アーハッハッハッアァ！　ザマアねぇなぁ！」

破面もどきは俺が死んだと思ってやがる。所詮は破面もどきか…。

見てるよ絶対一泡吹かせてやる。

とりあえず左は捨てる。右に霊力を集中。

ズッ…ズッ…ズ……。

よし！　少しずつだが傷口が塞がってく。だが今俺には傷口なんてどうでもいい。

「……」

骨に霊力を集中。骨に霊力を集中。骨に霊力を集中……。

……バキバキッ……。

「ぐあぁぁ…」

「あ？」

よし、荒療治だったが無理やり直した。
ちっあんまりに痛かったから声に出しちまった。
破面もどきがゆっくりとこっちに近付いて来る。
絶望的だがまだだ。

立てる右腕は動く、充分だ。

「……っと」

俺は立ち上がる。
それでも破面もどきはゆっくりと近付いて来る。

（次で決めねえとな……）

俺は空座町虚ハザード事件で集め、抑えていた霊力を、すべてでは

ないが右腕に集中させる。

……ググッ……！！

よしっ。何か右腕に新しい感覚を感じた。これに賭ける。

気付くと破面もどきと距離、約５メートル。

俺は右腕を少し引き、勢い良く破面もどきに突き出す。

「喰らいやがれ！」

俺のイメージだと次の瞬間、何かビームっぽいのが出る、とか思っていた。

だが、

ズズッズッ……シュッッッ！！

折れていたエッジニーと、左腕の爪が引っ込み、右腕の爪が伸びた。

ザシュッッ。

伸びた俺の爪が破面もどきの胸を貫く。

「……ガアァァァッッ…！？」

やったか？

「……くそっ許さねえ！」

しかし破面もどきはすぐに立て直し、叫びながらこちらに斬魄刀を突き出してくる。後、どうでもいいが許してもらうつもりはない。

……仕留められなかったか。くそっ体が動かねぇ…。

（万事休す、万策尽きた……）

……ここまでか俺の虚生活。さらば夢見たヴァストローデ。

俺は消滅を覚悟した。

だが、

「イイネ。面白いヨ、君」

バァァァァァン。

某バイ菌の声が聞こえ、突然破裂音が聞こえた。目の前が煙で見えない。

そして煙が晴れ、前を見ると、腕が吹き飛び悲鳴を上げる破面もどきと、マッドサイエンティストこと十二番隊隊長マユリさんがいた。

……何か助かっても厄介そうだな…。

いやむしろ…、

これじゃあ助からなくね？　どの道…。

第十話　感覚も大事（後書き）

どうでしたか？
タイトルも変わり、修正完了です。
マユリさんは無理やり出した訳ではなく、十話は前のパターンか今回のパターンかでした。
では。

第十一話　科学者と被験者（前書き）

どうも、最低でも週１ペースで頑張ろうと考えていた矢先この有り様の作者です。
夜のコールカッケェとか思いながら小説書いてました。・・・関係ないですね、スイマセン。

ではどうぞ。

第十一話　科学者と被験者

「やあ、元気かネ？　爪の」

うわぁ…マユリさんだ……。
もしかして俺、マユリさんに目を付けられたか？
……俺、テイクアウトされてドロドロのぐちゃぐちゃになるまでいじられるのか？　……やばい。
リアルでバ〇キ〇マンやフ〇ーザ様の声を聞けたのは嬉しいが…それでも俺の頭の中は恐怖ばかりだ……。

「いやぁ…元気じゃないんで帰っていいですか？」

「おや？　帰るのかい？　キミには帰る場所があるのか？　興味深いネ」

くそっ。普通に返された。

「まあいい。単刀直入に言うとキミには…「ウオラァァァ！」

マユリさんが何か言いかけた時、片腕を失った破面もどきがそれを遮った。

ヒュッッ。

破面もどきが斬魄刀を突き出すがマユリさんはそれをかわし、

ドカァァン。

爆発。破面もどきは両腕を失う。

「全く、五月蝿いヨゴミめ。お前には興味は無いんだヨ。もどきから手に入る研究結果などもういらないヨ」

「あああああああああ」

うわっ恐っ…。とか思っていると、

カチッ。

と音が聞こえ、

ドカァァン。

破面もどきの頭が吹き飛ぶ。うわっ恐っ…（本日二度目）。

「フン」

まるで汚物を見るような目で破面もどきの残骸を睨むマユリさん。

「爆弾はキミ達が戦っている隙に充分仕掛けられた。それにターゲットはボロボロになったし、楽になって良かったヨ」

いやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいや。

……この人マジ恐え。

「さて、このクズはどうでもいい」

……破面もどきのランクがゴミからクズへとランクダウン。

「ワタシはキミに用があるんだヨ。爪の」

ヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバい。

このままじゃ俺ヤバい……。

どうする俺？

？ドロドロのミンチコース

？三万円で勘弁してください

？バイバイキーン

？だな。ちなみにマユリさんが星になるわけじゃなく、俺が全力で逃走するって事。

……つーか？はバッドエンド、？はチンピラに絡まれたオッサンじゃん…。

隙を見て逃げようと思っていると、

「いや、死神もどきと言った方がいいかな？」

「!?」

……何でその事を知っている。浦原さん達しか知らないはず。

「何で知っていると言った感じだネ。いいヨ教えて上げよう」
今だ！　少し気になるが、命を大事に、が俺のモットー。説明好きなブリーチキャラに感謝！
俺は何とか立ち上がり、全力でソッコーでダッシュ。
兎に角全力で走る。残りの霊力で走る。

俺が命からがら逃げ着いたのはいつかみたいに路地裏。
敵（死神とか滅却師）を撒くには路地裏だ、とか考えていると、
「まさかまだこんなに動けるとは…ククク、面白いヨ、キミ」
決めた！　路地裏なんて信じない！
俺の目の前に最凶、外道、鬼畜（マユリさん）が居た。

「ククク、これがある限りキミの霊圧は追えるヨ」
言いながら白い粉みたいなのを見せてくる。
……？
何だあれ？
「これはキミの仮面の一部だヨ」
なるほど。それだと俺が死神に近いことも調べられるな。
でも、
「何でそんなん持ってんの？」
だ。何故俺の仮面の一部をマユリさんが持っている。
「ああ、これはこの前十一番隊の野蛮な猿共に戦闘中にキミのサンプルがとれたら持ってくるよう頼んだヨ」
ああ、一角さんと変態オカッパナルシスト達か。なるほど。
よくもまああんな小さい粉を。
「まあ、そんな事はどうでもいいヨ」
いやいやいやいや待ってくださいマユリさん。
「キミにはワタシと一緒にソウルソサエティに来てもらうヨ」
くそっ体が限界だ。動かねえ……。

「勿論研究材料としてネ」

ヤバいヤバいヤバいマジヤバいどれくらいヤバいっかていうとマジヤバい、とか言ってる場合じゃねぇ！

「待て待て待て待て待て待て待てお願い」

俺の心を込めたお願いも無視される。

マユリさんが近付いて来る。

「安心したまえ。ドロドロになるまで研究するだけだヨ」

安心できるかぁぁぁぁぁ！

……駄目だ悪魔（マユリさん）が来る。

今度こそさよなら、俺の目指せヴァストローデ生活。

自分のヴァストローデ姿を妄想していると、

チキッ！

「ん……」

ボン！！

マユリさんの顔面辺りで小さな爆発が。

ドサッ。

マユリさんが倒れた。

「いやぁアルサン！　危なかったっスねぇ！」

そこには黒いマントで身を包んだ浦原さんが居た。

あのマント見たことあるな…あああれだ！　霊圧を完全に遮断するやつ。

藍染でも寸前まで察知できなかったやつだ。

「た、助かった…」

ここで俺の意識はブラックアウトした。

目が覚めるとそこは、

「知らない天井だ、と言いたいところだが確かここって」

見渡す限り荒野、枯れ果てた木。そうここは、

「浦原商店の地下か」

とりあえず起き上がる。

そして体調の確認。

……お！　霊力は回復してるっぽい。

「起きましたか！　アルサン」

浦原さんが歩いて来た。あれ？浦原さん、何時もの下駄帽子被ってない。一護に壊されたのかな？

「浦原さん、わりぃマジ助かった」

まず感謝。本当に感謝。

「かまいませんよ～」

それにしても何でこんなにコンディションバッチリなんだ？

「なあ、浦原さん」

「何スか？」

「何で俺こんなに元気なんだ？」

「井上さんです」

なるほど。そういうことか。

「アルサンはあの後意識を失い3日間寝てました。井上さんに頼んだら、井上さんの能力でアルサンを四時間くらい治療してくれました」

うわっ…何かスイマセン井上さん…。ホントありがとうございます。

「それは…礼を言わなきゃな」

「そうですね」

ふと思った。

「マユリさんは？」

「放置っス～」

……マジか。いやでも当たり前か。そうだ問題ねぇな、ウン。

「でもびっくりしましたよ～。大きな霊圧が多々あると思ったら、隊長格がいましたし」

「あ～そうだ浦原さん。何か俺、マユリさんに死神もどきって言われた」

すると浦原さんは少し真剣な顔付きになり、

「……そうッスか」

とだけ言った。

とりあえずマユリさんからは助かった。とりあえず、だが。

「あと、助けてもらって悪いが一つ頼みがある」

「何でしょう？」

いくら記憶をいじってもマユリさんは技術開発局局長だ。それにソウルソサエティも。

「俺を……」

俺は決意をする。生きるために。

「俺を虚園（ウェコムンド）に行かせてくれ」

第十一話　科学者と被験者（後書き）

どうでしたか？
作者的にマユリさんを書いていて段々、ガムやシールを使う奇術師が浮かびました。何となくですが。

あと本当にありがたいことに皆様のおかげで、ＰＶアクセス１０万、ユニークアクセス１万突破しました。本当にありがとうございます。

では。

第十二話　厄日（前書き）

どうもピースウォーカーを早くやりたい作者です。
サイレンカッケェとか思いながら小説書いてました。・・・関係ないですね、スイマセン。
主人公はまだこの話では虚園に行きません。

ではどうぞ。

第十二話　厄日

「うおぉらぁあ！」

「遅え！」

キィンカァン。

重い。受け止めるたびに俺の腕が痺れる。一発一発に霊圧がこもった剣撃。楽に撒けていたころとは段違いだ。

突然だが俺は今、一護と打ち合っている。

え？何でかって？

それは少し前まで遡る！つーわけで回想シーン！

「俺を虚園（ウェコムンド）に行かせてくれ」

これから先、俺はソウルソサエティやマユリさんから狙われるだろう。

特に現世にいれば尚更だ。

だが虚園に行けば、ソウルソサエティも虚園に行ってまで俺を狙わないかもしれないし、狙われても逃げられるだけの力を虚園で虚を喰うことによってつければ良い。

浦原さんは原作でガルガンタの開き方を知っていたし、この人に頼めば間違いないだろう。

「……わかりました。マユリサンのことを聞けばアタシからアルサンに虚園行きを勧めてましたし」

「いいのか！？」

俺は期待いっぱいなテンションで浦原さんに確認する。

すると、突然浦原さんは黒い顔になり、

「ただ、アタシからではなくアルサンから頼まれたのでタダでとはいきませんよ？」

「……は！？」

「あ～あもったいないッスね～。アルサンから頼んだ故に、雑用をしなくちゃならないとは」

「え？」

「ではアルサン、アタシは黒崎サンのとこに一旦戻ります。今日は浦原商店で休んでいくといいですよ。では」

「ん？」

浦原さんは颯爽と去って行った。

何なんだ？　そしてあの黒い顔は…？　マズい、嫌な予感しかしない……。

まあいいや。とりあえず居間でテッサイさんと茶しばこう。

俺は居間へと歩いて行った。

その後、俺は居間にて眼鏡が壊れたテッサイさんと茶をしばいた（卍禁大封で眼鏡のみの損害とは…）。

そして夜になり、浦原商店の食堂にて商店メンバーが夕食を食べる中、（実はコーヒー大好きな）俺はコーヒーブレイクを楽しんでいた。しかし、その幸福な一時（ブルーマウンテンを味わうこと）は浦原さんの、

「そういえば、明日一日中アルサンが浦原商店の奴隷になってくれるそうですよ」

「ぶっ」

という爆弾発言により阻害される（ああ、俺のブルーマウンテンが…俺の口から…リリースされていく）。

「はぁ！？　何いってんだよ浦原さん！　俺のコーヒーブレイクをブレイクするな！　コーヒーブレイクはブレイクしていいもんじゃねえぞ！」

とりあえず怒鳴ってみるが、浦原さんは驚いた顔で、

「え？　さっき言ったじゃないスか」

「ん～確かに朧気にそんなことを言っていたような気がするが……。でも確か奴隷じゃなくて雑用じゃなかったか？」

「雑用も奴隷もかわりませんよ」

「そんなもんか？」

「そうです」

いまいち府に落ちないが…まあいいか。

と俺が考えつくと、テッサイさんとジン太と雨が

「（どさくさにまぎれてワンランク下げて扱いやすくしましたな…）」

「（…バカだな俺の下僕二号）」

「（…バカ）」

と浦原さんの真意に気付いていたのは別の話。

「それで明日やってもらいたいことは……」

「よお。久しぶりだな石田」

「？　アルコ・バ・レーノ！？　…何の用だい？」

只今八月一日早朝。俺は今石田の特訓場にいる。

ヒュッッ。

俺は爪を石田へ伸ばす。

「…何の真似だい？」

石田はそれをサイドステップでかわす。

「僕はまだ君と決着をつけるつもりはないのだが」

「いや、お前がソウルソサエティに行けるかどうかをな」

「…なら君には修行の成果第一号となってもらうよ」

ヒュッ。

言い終わる瞬間矢を放ってきた石田。

速い。前とは段違いだ。だがこれくらいなら。

キンッ。

俺は矢を見切り爪ではじく。

「まだまだっ」

ヒュッヒュッヒュッヒュッヒュッヒュッヒュッヒュッヒュッヒュッヒュッヒュッ……。

「なんの」

キンキンキンキンキンキンキンキンキンキンキィン……。

矢の嵐。俺は爪とエッジニーではじくが、

「（威力が上がってやがる）」

腕が痺れてきた。

ヒュッヒュッヒュッヒュッヒュッヒュッヒュッ。

それでも止まない矢の嵐。

「うおぉぉぉぉお！」

エッジニーだけで何とかしようと爪を引っ込め、脚に意識を集中する。

シャッ。

おお！　足の指先からの爪が！　イカすぜ！

キンキィンキンキィンキンキィン。

膝、爪先、膝、爪先、と矢をはじく。

ここで矢の嵐は止まった。

「強くなっているのは僕だけじゃない、か。アルコ・バ・レーノ、今はお互いこれくらいで充分だろう？」

「そうだな。別に本格的に殺り合いたかった訳じゃねぇしな」

「それじゃあ僕は帰るよ」

ザッザッザッ……。

石田は居なくなった。

さて、次は、と。

俺は浦原商店に向かった。

それで今は夜の１１時。浦原商店の地下にて待機。
石田と殺り合った後はこの時間まで何もなかった（…あんなことをしていたのは俺じゃない。昼間浦原商店に居たのは俺じゃない。あれは俺じゃない）。

今回浦原さんに頼まれたのは一護と石田の力量の確認だ（…昼間、『浦原さんに嵌められた』と思ったアイツは俺じゃない。アイツは俺じゃない）。

浦原さんの話だと一護はそろそろ来るらしい。でも原作だと一護って午前１時に呼ばれなかったか？（俺は石田の確認以外何もしていない。昼間のあれは俺じゃない）。と、１人唸っていると、

「俺のツッコミの何がわりぃ！」

一護が入ってきた。

「あ？　何でテメーがここに居るんだ？」

俺を見て背中の斬月を掴む一護。

「あ～まあアレだ。とりあえず…お前と殺り合いに来た」

さあ、戦闘開始だ。俺は一護に飛びかかって行った。

てな訳で今に至る（つーか回想長くね）。

それにしても一護の成長レベルは他とは大分違うな。流石主人公。

シュッ。

「おっと」

俺が考え事をしていると、一護による突きが俺の脇腹を掠める。

キーンッ。

すかさず爪で反撃するが、難なく斬月で止められた。

「ちっ」

俺は一旦距離を置くべく後ろに跳ぶ。

「（虚園に行く前に試すか）」

一護との一戦で、さっき石田との戦いで掴んだ確信を実践するか。

「何のつもりだ？」

俺がそのために構えをとくと一護が警戒しながら訊いてきた。

「さあな？いいからきな」

とりあえず挑発。案の定突っ込んできた一護。

ヒュンッ。

一護の斬月が俺目掛けて真っ直ぐ振り下ろされる。

シャッ。

俺は上半身に意識を集中する。すると両肩から斜めに刃が伸び、それが俺の胸の前でクロスする。

キィンッ。

クロスした刃により、斬月を受け止める。

「！？」

思わぬ対処により、少し驚く一護。

「（やはりな）」

俺は自身の体の能力を理解した。

恐らく俺の能力は、

簡単に言うと、俺の体全身至る所から自在に刃が伸びる、という感じ。

ただ伸ばせる刃の長さには上限があり、推測だと今のところＭＡＸで６メートルくらい。この上限は霊力と比例するのだろう。ただこの６メートルは、俺の体から出せる刃の長さの合計、つまり体から伸びている刃の長さを合計６メートル以内に収めなければいけない、ということ。

だから破面もどきと戦いで、エッジニーと左腕の爪をしまうことにより、右腕の爪が６メートルくらいまで伸びたのだと思う。

「いやぁお疲れ様ッスアルサン」

不意に浦原さん登場。

「おい浦原さん！　これはどういうことだ？」

浦原さんに気付き俺について質問する一護。

「浦原さんからお前の最終試験ってことで俺はお前と闘えって頼まれたの」

説明しながら刃をしまう。

「そういうことです。…それにしてもアルサン。昼間は良いものを見せてもらいました」

「やめろ！　言うな！」

絶対に思い出したくない光景が脳裏をよぎったが直ぐに振り払う。

「それでどうでしたアルサン？」

「ん？　ああ充分だろ。多分一護が本気出したら俺は勝てねーや」

これは推測。まあ十中八九当たりだが。

「とりあえずお疲れ様でしたアルサン。今から用事があるのでもう休んでいていいですよ」

「……わかった」

用事とは一護達のことだろう。俺が居ても意味ないし、出るか。

俺はくるりと反転し、背を向けながら一護と浦原さんに手を挙げ浦原商店に向かう。

居間に着き、今日はもう疲れたのでもう寝る。

俺は体を小さくし、座布団を枕に寝転がった。

第十二話　厄日（後書き）

どうでしたか？
何か文が支離滅裂なような・・・。
やはり石田は目立ちますこの小説。

皆様の感想＆お気に入り登録があれば、作者はヒットポイント０でも倒れず、エクス〇スと戦い続けられます（このネタはかなりマニアックな気が・・・）。

では。

第十三話　便利なことは素晴らしい（前書き）

どうも基本兵士はお持ち帰りな作者です。
ブラックアウトカッケェとか思いながら小説書いてました。・・・
関係ないですね、スイマセン。

やっと虚園に行きます。

ではどうぞ。

第十三話　便利なことは素晴らしい

「……ん」

俺はふと目を覚ました。時計を見ると時刻は１時１０分ぐらい。そろそろ一護達が集まるな。

俺はのそっと起き上がり、浦原商店地下に向かう。井上にも礼を言わなきゃだし。

「あっアルサン。起きましたか」

「ん。まあな」

俺が地下に着くと浦原さんが気付き、声をかけてきた。

「一護は？」

「夜風に当たってくるとかありきたりなことを言って、外に出て行きました」

確かにありきたりだな……。でもいいじゃん。だって彼、主人公だぜ？　多少くさいこと言うくらいが丁度いいよ。

「ところで俺はいつ虚園に行けんの？」

あんな屈辱を味わったんだ（内容は言わない）。いい加減虚園に行きたい。

「ああ、それなら黒崎サン達をソウルソサエティに送った後にガルガンタを開きましょう」

「わかった」

っしゃあ！　虚園に行ってヴァストローデになってやらぁ！

「じゃあアタシはそろそろ集まったと思うので黒崎サン達を迎えに行きますね」

「りょーかい」

浦原さんは浦原商店の入り口へと歩いて行った。

「……さてと。暇だし、技の練習でもするか」

とりあえず浦原さん達が来るまで、自分の能力の練習でもしようと少し霊力を解放する。

俺の能力はまだ荒削りだ。まだ試したいこともある。

とりあえず手を前にかざす。

「伸びろ」

シュッッッ。

刃の発生箇所を一つに絞ったからが大分伸びた。でもなぁ…、

「直線的すぎんだよなぁ」

長さを自在に操れんのは中々使い勝手がいいんだが。もっと欲しいんだよな～。

シュルッバシュウゥ。

ひとまず伸ばしていた刃を戻す。

ん～どうしよ。

とりあえず鎌みたいなやつがいいな～。

もう一度手をかざし、

シュッ。

今度は細い鉄の塊が伸び、

ヒュンッ。

先端が曲がり、刃となってそのまま伸びた。所謂鎌みたいなやつ。
よし、思った通りだ。
俺の能力はイメージが大切だな。
エッジニーを出した時だって膝蹴りをかましたいとか、破面もどきの時だって離れている相手を倒したいとか思っていたし。
「（やべえ俺この能力メッチャ好きだ！！）」
と新たな発見で興奮していると、浦原さん達が戻って来た。
「…す…すごーーーい！！　あの店の地下にこんなでっかい空間があるなんて！　かっこいい！　秘密基地みたい！！」
今更だがすげーな。俺は今、漫画で読んだ場面に居る。何でこの世界に来れたか知らないが感激だな。……と井上以外には出来ないであろうリアクションを見てそう思う俺だった、…じゃなくて。
俺は井上達の方へと歩き出す。
見るとテッサイさんが感激し、泣いていたが気にせず井上のもとへ行く。
「あ？　爪野郎。やるのか？」
途中、まだ信用しきっていないのか（信用させることはしていないから当たり前だが…）一護が睨んできたがスルーした。
「あ～井上？　だったか？」

一応いきなり、井上、とか言わずクエスチョンマークをいれながら声をかける。

「……はい」

かなり警戒しながら肯定する井上さん。…まあ仕方ないか。

「俺のこと治してくれたらしいな。助かった。感謝する」

まず礼を言わないとな。

「えっ！？　…は、はぁ…」

まさか虚に礼を言われると思ってなかったのか驚く井上。

「……あ～あと俺はアルコ・バ・レーノだ。アルと呼んでくれ」

我ながらぎこちないな。俺はホント女性には免疫がないらしい（昔から変わんねーな俺…）。はぁ……。

「……」

急に黙り込んだ井上。…俺何か変なこと言ったか？

「……アルさんは変わった人…いや虚ですね。人間らしいというか虚らしくないというか」

俺普通に人間だったしね。死んでから虚になった訳じゃないから（多分）。

「よく言われる」

「あはは！　でしょうね」

警戒を解いてくれたっぽい。

周りを見ると井上に驚く一護（多分俺と普通に話しているからだろう）、そしてその一護に心配そうな視線を受けている石田とチャド（俺が居てもほぼ原作通りだな）。

パンパン！

「ハイハイ皆サーン！」

浦原さんが頃合いだ、と注目を集める。

「こっちにちゅうもーーーく♪　いきますよーーー♪」

パチン！

浦原さんが指を鳴らすと、

ズ…ゾクッガゴン！

穿界門出現。

その後、暫く穿界門の説明があった。ただ生でこのシーンを見るのは面白かった。コンが出て来て猫は大丈夫だったがぬいぐるみが喋ると井上さんですら驚いたり、チャドがコンをいじったり、浦原さんが一護の脇腹を突いたりと、原作通りだった。
俺は空気になってその光景を傍観していた。

そして一護達は一護がコンに一言言い、穿界門に消えて行った。

「…任せましたよ…黒崎サン…」

浦原さんはポツリとそう言い、暫くして俺に向き直る。

「…さあ、次はアルサンッス」

「ああ、そうだな」

「では、ガルガンタを開きますよ」

「ああ、頼む」

「……我が右手に界境を繋ぐ石、我が左手に実存を縛る刃、黒髪の羊飼い、縛り首の椅子、叢雲来たりて我・つきを打つ」

キィ…ン…ズッゴアッ！

浦原さんが詠唱を終えると目のような形のエネルギー体みたいなやつが出現した。

「これがガルガンタッス。中に道は無く霊子の乱気流が渦巻いています。霊子で足場を作って進んで下さい。暗がりに向かって進めば虚園（ウェコムンド）に着く筈です」

「りょーかい」

「それとこれは選別ッス」

ドサッ。

俺の目の前に黒い布に巻かれた小さな物が落とされた。

それを拾い、布を取る。するとケータイっぽい物がでてきた。

「それは通信機みたいなもんッス。それがあれば虚園からでもアタシと連絡がとれます」

マジか、すげーな。

「そしてその黒い外套は霊圧を完全に消せる代物ッス。アルサンの霊圧は大きいので虚園ではそれが必要だと思いまして。後、大分大きめに作りましたのでアルサンでも問題ないでしょう」

マジ！？　確かによく見るとあの外套でしかも俺用とか！　…欲しかったんだよな！でも……、

「浦原さん。その…何で俺にこんなよくしてくれるんだ？」

これは気になる。珍しいとは言え、優遇しすぎだろ。

「……罪滅ぼし…かもしれません」

シリアスな顔で浦原さんは続ける。

「アタシは朽木さんや黒崎サン達を利用しています。ですから、これは自己満足。最低なアタシの自己満足。……それにアタシは過去にアルサンのような人を見ました。だからだと思います…」

「……」

過去に見た人達とは平子達だろう。俺は黙ってガルガンタの方へ歩き出す。

「自己満足だろうが俺には関係ない。いずれ今までの恩は返す」

「・・・そうですか。では、アルサンが完全に浦原商店の奴隷になってくれるのを待ってます」

普段の顔に戻り、見事に雰囲気を壊してくれた浦原さん。

「なるかぁぁ!!」

俺は怒鳴りながらガルガンタへと入って行った。

第十三話　便利なことは素晴らしい（後書き）

どうでしたか？
浦原さんの心情を捏造してしまいました。すいません・・・。相変わらず支離滅裂です。・・・すいません。

次回はあの人達がでます。

では。

第十四話　声は揃えて（前書き）

どうも作者です。
ムスタングいい！とか思いながら小説書いてました。・・・関係ないですね、スイマセン。
今回から虚園編です。
ではどうぞ。

第十四話　声は揃えて

「ふぅ……着いた…」

それにしてもガルガンタの中は瞬歩も響転（ソニード）も飛廉脚も使えなかったのは不味かったな。……あれはヤバかった。わかりやすく言うなら発泡スチロールの上を走る感じ。
俺の能力は霊力のコントロールがミソなので足場は簡単に作れた。だが、それで調子に乗って思いっきり走ったからさあ大変。霊力のコントロールを持続して走らないとヤバい。マジで。

まあ、そんな訳でガルガンタを駆け抜けた俺は今、月が綺麗な砂漠に居る。
何故って？　そりゃあガルガンタを抜けたらここに居たからだ。

「にしても虚園って静かだな～」

俺はぼ～っと月を見上げる。
すると、

「……はっ……はっ…はっ」

小さな人影が必死に走っていた。

てかあれ、ネルじゃん。

ネルは、何か足を引きずりながら走る変なギリアンに追いかけられていた。

ペッシュとドンドチャッカがいねえな。はぐれたのか？

とりあえずあのギリアン、怪我してるっぽいし余裕で殺れそうだ。

俺は外套を羽織り、ネル達の方へ駆け出した。

とりあえず接近成功。

俺はギリアンの斜め前方から接近し、跳躍。

「え？」

ギリアンが何か驚いているが気にしない。

「そぉいっ」

「ぐほぉ……」

そのままギリアンの顔面に蹴りをかます。そしてら何かギリアンが変な声を上げ、ギリアンの頭が思いっきり後ろに反る。

「とうっ」

だが俺は気にしない。そのまま反った頭に踵落としを落とす。

「イヤァァァァァ！！」

ギリアンが変な悲鳴を上げたと思ったら、

ビリィィィィ！

という音とともにギリアンの頭が落ちていった。

俺ＴＵＥＥＥＥＥＥ！　…じゃなくて。何かおかしい、と思い着地する。

そもそもビリィィィィ！　って何？　とても首が落ちた時の効果音じゃないだろ。

俺はもげた（？）首の方へ近づく。するともげた（？）首はもぞもぞっと動いていた。きもっ！

暫くすると、

「……一体何なんだ？」

とか言いながらもげた？　首から何かが出てきた。

裏ボスか？　裏ボスなのか？　とか思っていたら…ガリッガリで虫っぽい虚、てかペッシェじゃん！が出て来た。

これは悪いことをしたな、と謝ろうとしたら、

「や…やめれーーー！！やめてけろーーーーーー！！」

後ろから声が聞こえた。原作通りのセリフ、ありがとうございます。俺はネルの方へと振り向く。

「ネルたつがあんたに何スただ！！　イズワルはやめてけろっ！！！」

原作通りの（ｒｙ

すげぇよ！　生ネルだ！　実は鬼強なネルだよ！

「ああ…わりぃ。てっきりお前がギリアンに追われてたのかと思って」

とりあえず謝る。

見るとさっきのギリアンは合体を解き、ドンドチャッカとバワバワ

が居た。なるほど、さっきのギリアンは下からバワバワ、ドンドチャッカ、ペッシェの順で組み、その上からギリアンの衣装を着ていたのか。足を引きずっているように見えたのはバワバワが這っていたからか。

「勘違いとは言え悪かった」

少し頭を下げた。

「「「！？」」」

「ほんとーにっ申ス分けあるまスんでスたっ！！　ネルたつのギリアンのギリギリ追跡ごっこがまさかそんな誤解を生むなんてつっとも思いませんで……」

何だよその遊び……。

「別にギリアンの格好しなくてもよくね？　それ」

「いやぁネルはドMなもんでそれぐらいリアリティと緊張感がないと楽スくないんす」

「…ああ……そうか」

俺は突っ込まなかった。この役目は一護に任せよう。

「ん～じゃあ詫び代わりに（ホントは俺が悪いんだが…）ギリアンが一杯居るとこ教えてくれね？」

「ギリアンっスか？ああ、それなら最近、ギリアンの群れが虚夜宮（ラス・ノーチェス）に向かっているらしいっス！」

……ん、あれか？　藍染がソウルソサエティからずらかる時に迎えに来た群れか？

「ここから遠いのか？」

現在地は虚夜宮（ラス・ノーチェス）から少し離れた所らしい（ネルいわく）。俺的には極力虚夜宮には近付きたくない。

「はい～。歩くと遭遇するまでに5日はかかるっス」

言いながら西の方を指差すネル。

「ちなみに虚夜宮はどっち？」

「あっちっス」

今度は東の方を指差すネル。

「それにスても変わった虚さんスね。虚なのに虚園の地理をこんなにもスらないなんて。虚夜宮の方向くらい虚の常識っス」

「あ～俺、現世から来たもんでな」
「ホントっスか！！」
言った途端目を輝くネル。あとペッシェとドンドチャッカもだ。
「都会ものっス！　すごいっス！！　羨ましいっス！！！」
そうなのか？
羨望の眼差しで俺を見るネル。
「お名前は何て言うっスか？」
「ん？　ああ、アルコ・バ・レーノだ」
「アル子バレエ野？変わった名前っスね。これが都会ものスか」
「いや違う！　…いやいいや、とりあえずアルって呼んでくれ」
「わかったっス！　あとネルはネル・トゥと申スまス」
「ああ、よろしくなネル」
「ならば私達も名乗らなくてはな」
とペッシェが言い、ペッシェとドンドチャッカがこっちに来た。
「私はネルの兄ペッシェ・ガティーシェだ」

「更にその兄ドンドチャッカでヤンス」

「そして三人揃って…」

「「「■■■■■■■■■■■！！」」」

揃わねーな、やっぱり。俺的には怪盗ネルドンペが一番いいような。

ああ、やっぱり揉めてるよ。

それから暫く三人は討論していた。

「なあ、もういいか？」

「……あっ、すまないっス」

討論は落ち着き、俺は切り出す。

「もし良かったら俺をギリアンの群れのところまで案内してくれないか？」

「いいっスよ！　そのかわり、アルには都会の話スをしてもらうっス！」

「ああ、いいぜ」

「バワバワに乗って行けば5日より早く着くっス！　早く乗るっスよ！」

ネルは快く引き受けてくれた上、もうバワバワの方へと走っていった。

俺は残されたペッシェとドンドチャッカの方を向く。

「何かわりぃな。いきなりこんなこと頼んで…」

「いや構わない。そのかわりちゃんとネルに現世の話を聞かせてやってくれ」

やべえこの人達普通にいい人達だ。

「さて私達も行こうか」

「そうでヤンス」

「ああ」

俺はペッシェとドンドチャッカに続き、バワバワの方へと歩いて行った。

バワバワの方へ歩いていると、

「遅いっス～！　早く乗るっス～！」

ネルが叫んでいた。

まあ、こんな感じで俺の虚園生活は始まった。

第十四話　声は揃えて（後書き）

どうでしたか？

出ました三人組。彼らの言動に違和感があるかもですが・・・まあ、スルーしてください。

では。

第十五話　出だしが肝心（前書き）

どうも作者です。
ロードムービーカッケェ！とか思いながら小説書いてました。・・・
関係ないですね、スイマセン。
今回はアルに変化が・・・。
ではどうぞ。

第十五話　出だしが肝心

現在俺移動中。バワバワの上でネル、ペッシェ、ドンドチャッカ、俺の４人でトーキングを楽しみながらギリアンの群れの元へ向かっている。
ネル達に現世の話をしていると一々面白いリアクションをくれるので話している側も面白い。

「へぇ～。死神と滅却師（クインシー）ってやつらはおっかないっスねぇ。ワルモノっスねぇ」

「だろ」

ちなみに今は俺の逃亡劇を話していた。ネルが死神と滅却師をワルモノと認識したがあえて否定しない（日頃の恨みを込めて）。

「いや～、現世はおっかないっス～。問答無用で狙われるなんて」

ガクブルッと胡座をかいている俺の上で震えるネル。ちなみに俺は一護と違って、どこに座ってんだよ、とは言わない。何故なら虚の俺には……ねえからだ。……やどうでもいいか。

現世の話以外では、俺はペッシェとドンドチャッカに虚閃（セロ）の仕組みについて教えてもらっていた。虚閃はギリアン以上にならないと出来ないらしいが、一応教えてもらった。
虚閃の発射口は虚によって様々らしい。確かグリムジョーは掌、ヤ

ミーは口、ウルキオラは『破道の四〈白雷〉』みたいなノリで指先から、だったか。
……俺はどこから出るのだろうか。

しばらく移動していると、
「ギリアンの霊圧か？」
三体くらいだろうかギリアンの霊圧を感じた。
「停めてくれ。ギリアンだ」
「！？　……ああ本当だな」
俺はペッシェに声をかけ、バワバワを停めてもらった。
「ペッシェ。ギリアンの群れって三体だけか？」
「いや違う。恐らくやつらははぐれたギリアンどもだろう」
そういうことか。大半のギリアンの知能は低いからな、はぐれることがあるんだろう。

「じゃ、ちょっと狩ってくる」

「1人でいいのか？」

「ああ」

ペッシェの問いに俺は黒い外套をポンポンと叩き返事をした。

恐らくやつらはまだ俺達に気付いていない。

現世で鍛えられた（生きるために）俺の探査神経（ペスキス）をもってすればあんな無知なギリアンどもに気付かれる前に探知するのは容易い。更に霊圧を完全に遮断するこの外套がありゃあ三体だろうと気付かれずに殺れるだろ。

俺はギリアンの視界に入らねえように遠回りをしながら、迅速に駆け出した。

「おっ！　見えた！」

ギリアン確認。やはり三体。

ギリアン達は虚夜宮に向かって進んでいる。俺はギリアン達の視界から外れた所を疾走中。

「よし！」

ギリアン三体の背後を確保。

「っ！！」

そして跳躍。

ギリアン三体の頭を越え、落下しながら両手を広げ、落ちていく。

「（ここだ！）」

ギリアン達の頭の高さまで落下すると、左腕、胸、右腕から3メートルずつ刃を伸ばす。

ザシュッッッッ！

真ん中、右のギリアンは後頭部を貫かれ、昇華。左のギリアンは少し浅かったのか悲鳴を上げながら振り返ろうとする。

シュッバシュッ。

一旦刃をすべて引っ込める。

ギリアンがこちらを向き、口のあたりに光が集まる。

「虚閃か。だが遅え！」

ギリアンが虚閃を放つ前に俺は左手をギリアンにかざし、長さを４メートルに抑えた分太くした刃をギリアンに向かって伸ばす。

シュッッッザッッッ！

「グオオオオオオオオオォ……」

はいさよなら。三体目も無事完食。ごちそーさん。

ゾゾッッ！

「！？」

ペッシェｓｉｄｅ

「！？」

何だ今のは！？
さっきまでギリアンの霊圧が３つあったが、２つ消えたと思ったら直ぐに3体目のも消えた。恐らくアルが倒したのだろう。

だが問題はその後だ。
なんといきなりさっきの3体のギリアンを上回るギリアンの霊圧を感じた。何なのだろうか。

「ネル！　バワバワを出すぞ！」

「？　…わかったっス！　バワー！　発進っス！」

……気になるな。急ごう。

先程の場所に到着した。

「！？」

そこに居たのは普通のギリアンより大きく腕に黒い布を巻いたギリアンだった。

ペッシェｓｉｄｅ　ｏｕｔ

アルｓｉｄｅ

体に大きな力を感じる。

「おわぁっ！？」

ボコボコッッボコボコッッッッ！

あり？　何かボコボコいってる……。ってことは、

シュルッッ。

俺は事態を察し、黒い外套を脱ぎ捨てた。すると次の瞬間。

ボコボコボコボコボコボコボコッッッッ！

まず足が膨張。次に腕。そこから一気に視界が高くなった。

ボコボコボコ…シュウゥゥゥ……。

やっと落ち着いた。危なっ！　少しでも外套を脱ぐのが遅かったら破れてたな。

さて、落ち着いたところで状況をまとめようか。

簡潔に言うと俺、ギリアンになったな。そりゃあギリアンでもない俺がいきなりギリアンを三体も喰ったら嫌でもギリアンになるわな。うん。

とりあえず外套は捨てられないので拾い、腕に結び付けるか。

シュルッキュッ。

これでよし！　一旦ネル達のところに戻るか。

そう思い、振り向くと、

「「「！？」」」

驚いているネル達。

「よお！　元気か？」

「？　……アルっスか？」
「ああ、そうだぜ」
ネルの問いに答えてやる。
「なるほど。さっきのギリアンどもを喰ってギリアンになったのか」
「中々でヤンスな」
関心しているペッシェとドンドチャッカ。
「ギリアンになって理性を保っているのか。流石だなアル」
「ハハッそうか」
「アル～乗せて欲しいっス～」
「りょーかい」
ネルが乗りたいと言うので、手で摘み、頭の上に乗せてやった。
「おお～！　高いっス！　凄いっス！」
「そうかそうか」
うん俺かなり機嫌いいな。
まあ、とりあえずこれで第一関門クリアだな。

つーわけで遂にメノスデビューを果たした俺であった。

第十五話　出だしが肝心（後書き）

どうでしたか？
いい加減メノスなれよ！ということでメノスデビューです。
・・・そう言えばドンドチャッカ全然喋ってない・・・。

次回もアルが暴れます。

では。

第十六話　理性は大切にするべき（前書き）

どうも作者です。
更新遅れて申し訳ないです。・・・延長部活とかマジやめ（ｒｙ
今回は何か凄いことになりましたが・・・。

ではどうぞ。

第十六話　理性は大切にするべき

「さてネル、悪いがそろそろ降ろすぞ」

「あ、わかったっス」

俺がギリアンになってから暫くネルに遊ばれていた俺だが、あることに気付き、ネルを降ろす。

「ネル、ペッシェ、ドンドチャッカ。ちょっと行ってくる」

「ああ、わかった」

ペッシェとドンドチャッカは気付いていたようなのでそれ以上何も言わなかった。

ズシンッズシンッズシンッ…。

…ああ、そういやこれ俺の足音か…何か凹む。

そんなこんなで暫くうるさい足音を響かせながら歩いていると、ギリアンの群れを発見した。さっき気付いたこととはギリアンの群れの接近だ。

この群れこそが本命だろう。恐らくこの群れはさっき喰ったギリアン3体がはぐれる前に居た群れだ。

「ひーふーみー…一杯いるな」

…数えると大体３０は居た。

「ギリアンになったし、どんくらいやれっかな」

とりあえず臨戦態勢に入る。

ギュウ…！

まず群れの先頭のギリアンが口に霊力を集める。

…虚閃か。
少し前にペッシェ、ドンドチャッカから虚閃について教えてもらったが、ギリアンは総じて口から虚閃を出すらしい。
ここで実験を。

まず1つ、虚閃を撃ってみる。

ということで俺は口に霊力を集中させる。虚閃の撃ち方はペッシェとドンドチャッカから聞いていたから問題ねえ。

ギュウウウ……！

キタキタ！　いける！

キュンッ！！

ヤバっ！　野郎撃ってきやがった！　相殺しねえと。

キュンッッッッ！！

記念すべき初虚閃！　発射ァァァァァァァ！！

ドオォォォォォォォォン！

２つの虚閃が衝突し、大きな爆風が発生し砂煙で視界が悪くなる。

「…ふぅ助かった…」

砂煙が晴れ、俺はさっきのギリアンに向かって突進する。

よし、思ってたより遅くねえ！

俺は一気にギリアンとの距離を詰め、今度は至近距離で頭目掛け虚閃を出した。

キュンッッッ！

…まずは一体。

今度はさっきのギリアンの右隣に居たギリアンが、舌を伸ばして攻撃してきた。

原作で虚を喰っていたアレだ。

「うおっ！っぶねっ！」

何とかバックステップでかわし、

「オウム返し！」

今度は俺の舌を伸ばして攻撃する。

ビュッッッ！

狙うは仮面に守られていない目の部分。

ズドッッッドド…。

よし、命中。

それにしてもギリアンの舌ってすげえな。舌で貫く…とか。

シュルルル…。

舌を戻す。…舌にはギリアンの肉片が少し付いていた。

うっ…気持ち悪っ…。口の中に嫌な感触が広がる。しかし、

味は悪くない？　…むしろうまいかも……。

いやいや落ち着け。ここで堕ちたら理性のねえヤツになっちまう。

思考を切り替え、次のターゲットを見やる。

今度はこっちから仕掛ける。

別のギリアンの元へ接近し、そのギリアンの頭に手を当て、

ここで実験2。メノスになる前の能力は使えるか？

俺は掌に霊力を集め、

「いけぇぇぇぇ！」

前の感覚を思い出しながら刃を出そうと試みる。

シュッッザシュッ…。

で、出た。これはキタ。
俺の掌からは、現世の時から俺を支えてくれていた白銀の刃が生え、
ギリアンの頭を貫いていた。
今回の実験は、ギリアンになると理性を失い、元々の自分の能力を
使えなくなってるだけじゃね？という考察から試してみたんだが、
とりあえずうまくいって良かった。

とりあえず3体。さてどうすっかな。

バシュッッッ…。

とりあえず刃をしまい構える。

「じゃあ、突っ込むか」

俺はもっとギリアンが群れている所へと突進する。
そしてまず近くにいるギリアンの頸を刃で跳ねる。

スパッッッ…。

ホントに鈍いな。

コイツら。こうやって接近してんのに反応が遅え。

ギュウウ…

この霊圧は…虚閃か。
俺の探索神経（ペスキス）に霊力が集中しているのが引っ掛かった。

避けねぇと…。

シュッッッッ！

俺は足の裏から刃を伸ばし、空中へと。

ドゴォォォン！

そして俺が居た所を虚閃が通過していく。
更にその虚閃に巻き込まれ、何体かギリアンが消滅した。儲け！

ギュウウ…。

ちっまたかよ。
今度は空中だしどうすっかな。
……ええい！　ままよ！
ギュウウ…キュンッ！
俺は空中で虚閃を撃ち、その反動で虚閃をかわす。そしてギリアン達から少し離れた所に着地。
危ねぇ危ねぇ。ギリギリ、だな。
それにしてもやっぱ数が多いと面倒だな…。でもやるしかねえ。
ギュウウ…キュンッッッ！
虚閃で射撃。2体撃破。
ズッ！！
「なっ！？」
虚閃で出来た爆風からギリアンの舌が3本伸びてきた。
シュッッ！
最初に伸びてきた舌を刃を伸ばし、切断。
スパッッ！

2本目は掌から伸ばした刃で横一閃。

「ああっくそっ」

3本目は頭を狙った攻撃だったので頭を横に動かし、やり過ごす。

シュルルルル…。

その舌が戻ろうしたところを、

「逃がさねーよ」

手で掴み、

「おらよっと！！」

グイッと引き寄せる。

それで引き寄せられたギリアンの頭に刃を伸ばす。

そのギリアンを仕留め、周りを見ると、

「ちっ…囲まれたよ…どうしよ」

残りのギリアン達に囲まれていた。…やべえな。

…これは…詰んだな。

「アル！　飛べ！」

半ば諦めていると、不意にペッシェの声が。

俺はすぐに刃を伸ばし垂直に跳ぶ。すると、

「無限の滑走（インフィナイト・スリック）！！」

…すんごいヌルヌルした汁が俺の下を包み込んだ。

ペッシェだった。ネルとドンドチャッカとバワバワはいねえが。

ギリアン達も一斉にペッシェの方を向き、ギリアン達の視線にビビってガクガク震えているペッシェに近付こうとする。すると、

『ズテン！！』

全ギリアンが転んだ。チャンスだ！

ギュウウ…キュンッッッ！

俺は空中で虚閃を発射。転けていて且つ動きの鈍いギリアン達に成す術なく降る虚閃。

そして地面が近付いて来たので、ギリアン達の二の舞にならないように足の裏から地面に刃を伸ばし、地面にざっくり刺さったところで着地。

そこからはまだ立ち上がれないギリアン達に容赦なく虚閃をぶっ放しまくったり、刃を伸ばしたりして試合終了。

「ありがとなペッシェ。マジ助かった」

戦闘終了し、ペッシェに頭を下げる。

「ははははっ！　せいぜい感謝するんだな」

高笑いされたが助かったのはホントだし、別に何も言わない。

「それにしても道中に軽く教えただけなのに虚閃を普通に使いこなせるとはな」

「ん？　ああそうだな。道中のレクチャーが無ければどうなっていたことか…」

「ははははははっ！！　重ね重ね感謝しろ」

確かにそうだ。刃だけじゃ勝てなかっただろうし。

「にしても何であんた、来てくれたんだ？」

「ネルがお前の事を気に入ってるようなのでな。まあ私自身お前に興味があるし、…目立ちたかったし」

……最後何かボソッと言ってたな…。

「とりあえずギリアン達は全部仕留めたし、ネル達の所へ行くぞ」

「ああ、わかった」

ペッシェに言われ、後ろからついて行く。……あれ？　でも確か原作だとソウルソサエティに来たギリアン達の後ろにもっとデカいの居なかったっけ？　……まあ、いっか。

こうして、俺がギリアンになっての初戦闘は幕を閉じた。

ｓｉｄｅ虚夜宮（ラス・ノーチェス）

「ウルキオラ様」

「何だ？」

「藍染様を回収するギリアン達が……」

「……」

「全滅しました」

「！？」

「（何故かは知らないが早急に対処せねば）わかった。藍染様の回収には破面（アランカル）を向かわせろ」

「はっ」

「あと、ギリアン達の全滅についても調べろ」

「承知しました」

1人部屋を出て行く。

「（あのギリアンの群れを全滅させるとは…何か嫌な予感がする）」

そして1人思案するのであった。

第十六話　理性は大切にするべき（後書き）

どうでしたか？

予告通り暴れました。えっ？暴れすぎ？・・・いや～・・・すいません（汗）

ということで虚夜宮にも目をつけられました。まだバレてませんが。

では。

主人公詳細（前書き）

主観だったのでアルの容姿がうやむやに・・・。

一応載せますが、作者のイメージなので、気に入らなかったら無視してもいい感じです。

主人公詳細

アルコ・バ・レーノ（初期）

体長　約３メートル

容姿

仮面…ワイドな車の初心者マークのような形、色は白。

体…皮膚の色は黒。爪は刃っぽく、突き刺す事重視の丸い形ではなく、やや薄い形状（イメージ的にはＸＩＭＥＮのあの爪）。爪は３本ずつ伸びていて、長さはそれぞれ８０センチくらい。爪の色は黒。６頭身、体格はガッシリ系、尻尾は１，５メートル程度。

アルコ・バ・レーノ（ギリアン）

仮面…初期と同じ。

体…普通にギリアンだが背中から棘が生えている。左腕に黒い外套を巻いている。

主人公詳細（後書き）

どうだったでしょうか？
作者的にはこんな感じです。

まあ仮面の形は特に気にしなくてもいいと思います。

第十七話　慣れって恐い（前書き）

……はい、遅れてすいませんでした。９月は忙しくて…、主にテストとかテストとかポケ（ｒｙ

感想で９月中に更新します、とかほざいたのが９月の初め頃。すいません気付いたら月が変わってました。

あと今回の話は前の自分的には黒歴史だった話を削除した修正版です。

ではどうぞ。

第十七話　慣れって恐い

「ん～……」

っかしーなー…。一気にギリアンを喰ったのに、アジューカスになれねーんだなぁ…。３０は倒したのに…。まあ、同士討ちとかもさせたから３０全部は倒してねーんだろうけど。

「ア～ル～！」

数分前の戦闘を振り返っているとネルが話し掛けてきた。

「ん？　何？」

「アルもネルたつの兄妹になるっス！」

「は？」

いきなりかよ…。

「何でいきなり」

「だってネルはアルの事気に入ったっスから。それにネルとアルって似てるからコンビを組んだ時のコンビ名の語呂が良くなるっス！」

「ああ…なるほどな」

軽くね？　つーか後半の理由何？　確かに語呂良くなりそうだけど。

「まあ、いいけどよ」

別に嫌な訳じゃねえし、それにこんな純粋な目で見られたら…こ、断れねえ…。

「やったっス！　これでかっこいいコンビ名が生まれるっス！！」

…果たして本当に生まれるのか。

「ん？」

気付くと後ろから、ポン、と俺の両肩に手が置かれ、

「「つまり俺達の弟にあたり訳だな（でヤンスな）！」」

「……」

何故か勝ち誇った表情のペッシェとドンドチャッカが居た。

「…はぁ。まあ、そうなるか」

「ん？　どうした弟よ、溜め息なんてついて。私達の弟になったん

だ。もっと喜べ！　ははははは！！」

「うるせえよ！！」

それから晴れて兄妹となった俺達は、俺にとっては進化のためのギリアン狩りのため、ペッシェとドンドチャッカにとってはネルを虚園から遠ざけるため、ネルにとってはただの遊びのための旅に出た。

時は変わって、俺達一行は虚園をさまよっていた。見渡す限り、砂砂砂。つまり砂漠のような所にいる。

旅に出てから、俺はペッシェとドンドチャッカからメノスの技を色々と教わっていた。
原作では彼らは一応オリジナルの虚閃を開発したりと、この手の事には詳しいんだろうな、と思って色々教えてくれるよう頼んだわけだ。

そして今、ペッシェとドンドチャッカから指導を受けているところだ。ちなみにネルはお昼寝中だ。

「いいか？　アル。お前の虚閃は無駄だらけだ。この前の戦いを見ていて思ったんだが…」

「何だ？」

「お前の虚閃は霊子が拡散し過ぎている。確かにギリアン程度ならそれで充分かもしれんが、アジューカス級となると全く効かないだろう」

ん～そうか。初めて虚閃を撃てた時は、ぶっつけで出来たぜ！　って感じに内心ハイになってたんだけど　、やっぱまだまだか。

「なるほど。つまり中身のつまってねえスカスカな虚閃だったって事か？」

というと、ペッシェはビシッとポーズを決め、

「その通り！」

と言った。

「つまりは霊子を集中させるためにイメージし、放つ。口で言うのは簡単だがやってみるのは難しいのだ」

なるほど。やっぱ大切なのはイメージなのか、うん。やっぱすげーなイメージって。

「まあ慣れてくると当たり前のように出来るようになるでヤンス。要はこのイメージを直ぐに固められればそれだけ戦闘は楽になるでヤンスよ」

「おーなんかすげー」

と、補足してくれるドンドチャッカ。

確かに十刃（エスパーダ）の方々は当たり前のようにマジパネェ虚閃撃つしな。

…おお！　すげー。なんかカッコ良く虚閃が撃てるようになると思うとテンションが上がってきた。

「そういうことだ。だからお前はイメージを固めた虚閃の練習をするべきなのだ」

「おう。把握」

「そのためにはやはり慣れ、だ。ひたすらに虚閃を撃って練習しろ。勿論イメージを固めて、だ」

「了解した」

まぁそんな感じで始まった虚の技講座。

それからというもの、俺はひたすらに虚閃の練習に励んだ。

周りには特に建物も無く、遠慮無く虚閃をぶっ放しまくれる。

バワバワの横をズッシンズッシン歩きながら、虚空に虚閃をドンッっとかそんな感じ。

その霊圧に誘われたのか時々ギリアンの群れに襲われるが、前より格段良くなった虚閃で牽制しつつ、
近付けば能力使って俺のターン！と言った感じで１０体くらいなら１人で充分になってきた。

後１つわかった事もあり、俺の場合口からの虚閃より俺の能力によって伸びた刃から出した虚閃の方が、イメージもし易くしっくり来る。

これはどうなのか気になり、ペッシェとドンドチャッカに聞いてみたところ、

『ん？　別に虚閃なんて出そうと思えば体のどこからでも出せるしな。しっくりくるんならいいのではないか？』

と、ペッシェ。

『おー自分にあった虚閃の出し方があるんならそれに越したことはないでヤンスよ。そこから磨いていってもいいと思うでヤンス』

と、ドンドチャッカ。

要するに良いことらしい。

後、てか刃から虚閃とか、リアルツインバスターライフルもできんじゃね？　とかいうどうでもいいような思考がよぎった。

とかまぁそんな感じで虚閃を磨いている今日この頃。

自分的には中々虚生活をエンジョイしてきているな～、慣れって恐ろしいな～といつものようにバワバワの横を意気揚々と歩いている。

ドーン！

ああ、今のは俺の虚閃な？（というか誰に言っているんだろうか）

と一発虚閃を虚空に放ち、少し時間が経った時、

「「「……！？」」」

俺の現世の時に敵（主に一護とか石田）から逃げるために磨いた察知能力（探査神経（ペスキス）だと把握していいのか？）にデカい霊圧が引っ掛かった。

ペッシェ、ドンドチャッカの方を見ても、やはりこれを感じ取ったらしい。

「…なあ、これって…」

「…ああ、少し遠いが…ギリアン級だ。恐らくこっちに向かって来ているから間もなくしたら接触するだろう」

「…速いでヤンス」

多分、俺とネルが居なけりゃあ2人は逃げられるのかもしれねえ。それに、この2人なら本気を出せば勝てるんじゃねえかなぁ…。だけどこの2人はネルに刺激を与えねえために本気を出すのは不本意だ。

だったら、

「（俺が一丁アジューカスに下克上するしかねえな）」

…いや、下克上できるかどうかは別として、だけど。

「はぁ…。じゃあ俺が戦ってみるぜ？」

「…！？　大丈夫なのか？」

「さぁな…。まあ、やるだけやってやるよ。どうせ俺じゃ逃げきれんし」

ザッ！

音が聞こえた方を見ると、砂煙が発生していた。多分あそこに居るんだろーな。

やがて砂煙が晴れた。

「おめーギリアンの割には中々いい虚閃出してたじゃねーか？　まぁ所詮はギリアン、俺の敵じゃねーが」

そこにはまるでケロベロスのように3つの首を持ち、それぞれ狼面の虚が俺を睨め付けてそこに4本足で立っていた。

さぁ、

「（下克上といってやろうじゃねえか！）」

始めようじゃねえか。次のステップ（アジューカス）に進むために、
生き残るための俺の戦いを。

俺は臨戦態勢に入った。

第十七話　慣れって恐い（後書き）

どうでしたか？

…散々待たせてしまった挙げ句この分量…。申し訳ないです。

今回の虚閃についての解釈は作者の勝手な解釈です。

第十八話　詰み将棋の王将（前書き）

え～前回に投稿が遅かった訳ですが……、またやっちまった。

本当にすいません。

１１月は忙しく、１２月は冬休みの課題とモンハ……。

ではどうぞ。

第十八話　詰み将棋の王将

「おいおいおい、逃げてばっかかよギリアン」

「やだ怖え死にたくない」

砂煙りを巻き上げながら疾走する二つの影。

追ってる方はケロベロス野郎（アジューカス）で、逃げている方はもちろん俺（ギリアン）。

ゴウッッ！

「あぁぁぁ！　ちょ……タイムぅぅ！！」

「黙れ、ふざけんな！！」

後ろから風切り音が。

多分ケロベロス野郎がジャンプしてからの爪攻撃だったんだろう。

俺は一旦狙われた頭への攻撃を頭下げてやり過ごし、また走り出す。

これぞピタゴラスイッチ戦法！　……いや別に余裕な訳じゃねえよ？

俺がケロベロス野郎に喧嘩を売ってから約数分、俺はケロベロス野郎からの攻撃をとにかく避けて逃げ回っている。

今まで何とか無事でいるのも、戦闘開始時から探索神経（ペスキス）を使いながら、攻撃が来るだろう所を予測して逃げ回れているからだ。

いや～現世で生き延びるためにサーチ能力の鍛錬を積んでた内に、探索神経が磨かれてたとは。

……俺ってやれば出来る子？

ブオンッッッ！

「すんません調子にのってましたぁっ！」

俺は足払い攻撃をジャンプしてかわす。

俺がジャンプして空中にいると、ケロベロス野郎が虚閃（セロ）を撃とうしていた。

「……空中では身動き出来ないっていう常識は、ＢＬＥＡＣＨの世界じゃ通用しねぇ！」

俺は足元に霊力を集中させ、足場を作りそのまま虚閃の発射準備に入る。

ケロベロス野郎の虚閃は発射までのためが長え。

ならそれを相殺してやる！

カァッッッッ！

互いの虚閃が衝突した。
そかから相殺された互いの虚閃からの衝撃波が、俺とケロベロス野郎を襲う。

俺はその衝撃波に身を任せて後ろに飛び、ケロベロス野郎と距離を置く。

ズザァァ……。

着地成功！
俺はケロベロス野郎のいた方を見ると、ケロベロス野郎はやや後ろに下がっている程度だった。
恐らく踏ん張って頑張ったんだろうな。

「……驚いたぜ」

「あ？　何が？」

「俺の方が虚閃を撃ったのは早かったと思ったんだが、まさか空中から振り向いて俺の虚閃を後出しで相殺するとは」

「だって俺、ヘイスト掛けてっからさ」

「……は？」

「いや、ごめん何でもないし嘘だから」

ただ単にケロベロス野郎の虚閃が雑だっただけ。
俺の方が発射までの時間が短い上に、相殺するのに必要最低限の威力の虚閃出したから何とか相殺出来たって話。

ネル達はもう遠くまで逃げれただろうか。
俺はそのためにケロベロス野郎を引き付けながら逃げ回ってたんだけど。……逃げ回るので一杯一杯だったのもあるけど。

今の内に探索神経で探してみるか。

……ん～もう感知出来る所にはいねえようだ。

「よーしやるか？　ケロベロス野郎」

「おお、逃げんのは止めたのか。まあ、よく今まで逃げてたよお前」

「お褒めに頂き感謝するぜクソヤロウ」

俺は構え直し、ケロベロス野郎の方を向くと、

「……藍染サマに喧嘩売っただけはあるな」

「は？」

いや何コイツ。藍染の名前を出すとか……。

「普通喰うか？　藍染サマのギリアン部隊を」

「へ？　いや何でお前がそれを知って……」

「普通は喰わねえよ。藍染サマがギリアン部隊を召集してる事なんて虚園（ウェコムンド）にいるヤツはみんな知ってる。いくら自我のねぇギリアンでも藍染サマにビビって逆らわねえからな」

「……」

「それを喰うって事は余程の馬鹿か……」

「……」

「藍染サマに逆らう反乱分子って訳だ！　そこで今ギリアンを狩りまくってるヤツを潰していく内にお前の番が来たって訳だ」

「……！？」

えっ？……それって俺ヤバくね？

「それで俺はてめぇを消す為に命令されてきた来た訳だが……後は分かるな？」

はぁぁぁ！？　ケロベロス野郎って藍染の命令で来てたのかよ！？

ってことはもし俺がケロベロス野郎に勝利したとしても、死亡フラグが絶えないってことか。

「んじゃあ、つー訳でお喋りは終わりだ。いくぜ」

ケロベロス野郎が俺の方を向き、臨戦態勢にはいった。

……そうかなるほど。

俺は今絶賛大ピンチって訳か。

詰み将棋をされた王将みたいに。

腹を括るしかねぇ。

「じゃあ俺はてめぇを喰って強くなって逃げてやるよ」

「あ？」

「お前アジューカスだろ？　ならそれ喰って俺がアジューカスになって万事解決、だろ？」

……強いやつとの戦いってたるい。

勝てるかどうかもわかんねえし、負ける確率のが高い。

「逃げ回らせてもらうぜ。お前を倒して」

「はっ！　ふざけろ」

でもそれで活路が見えてくんなら、

「やってやるよ、ケロベロス野郎」

「いいぜぇ！　掛かって来いよ！　ギリアン！」

俺の言葉と同時に俺の悪足掻きが始まった。

第十八話　詰み将棋の王将（後書き）

何か前回と終わり方が……。

今回は待たせてしまった上に短かったですが、キリがよかったので。

そして展開が遅いのは原作と同様ってことで……いやすいません。

第十九話　やったか？って言うと大体やってない（前書き）

どうもＧｏｔｏｔｈです。

久しぶりにあまり間を空けず更新。

ではどうぞ。

第十九話　やったか？って言うと大体やってない

俺とケロベロス野郎は虚園の大きな砂漠に対峙中なう。

――距離は三十メートルくらい、よしいける、先手必勝！

何時も通り俺は口を開け、口に霊力が集中させられる。
別にときめいていねえけど、キュンって音がすりゃあ虚閃（セロ）の発射準備完了。
威力はケロベロス野郎を消し去るに充分なものに。

――ここまでの時間約一秒。

俺の虚閃を止めるべく響転（ソニード）で一気に近付いて来るケロベロス野郎の居場所を探索神経（ペスキス）で探知し、そこに向けて虚閃を発射！

「ちぃっ……」

響転によりブレながら俺の右方向距離十メートルに現れたケロベロス野郎の舌打ちが聴こえた瞬間、ケロベロス野郎のいた所から俺の虚閃による爆風が発生。

……やったか？　って言ったら負けな気がする。
俺は探索神経を展開し、ケロベロス野郎の安否を確認する。

「こんなんじゃ俺は死なねえよぉ！」
反対方向にケロベロス野郎を確認。

「あぁ、くそっ……。やっぱ爆風が発生したら大体生きてんだよな」
虚閃については俺が上。だからケロベロス野郎は接近戦に持ち込んできやがる。
……距離を取らねえと殺られる。

俺は振り向かず、そのまま前方に跳ぶ。
後ろから聴こえる爪によるスイングの音を気にしねえようにして直ぐさま振り向く。

「あぁあぁ……くそっ。こっちの攻撃がさっぱり当たんねー」
ケロベロス野郎はつまらなそうに三つの首をぶんぶん振る。
「お前の探索神経は何でそんなに鋭いんだ？」
「俺はどうやってお前が俺の虚閃をかわしたか気になるけどな」

「あぁ何簡単な事だよ……」

よし、ＢＬＥＡＣＨ特有の戦闘中にも係わらず説明しよう！　タイムきた！！

「お前が虚閃で俺に対応しようとしてんのは分かってたからな」

「へぇ」

今の内に攻撃！　といきてえところなんだが、さっきに探索神経とクイックで虚閃撃ったりのハイペースでいったから集中力が……。

「だから俺は頭を屈めながらこの三つの頭から虚弾（バラ）をお前の虚閃の斜め下から撃ってよぉ」

「……ふー……。なるほどね」

とにかく集中集中と。

「虚弾なら技の出が早えし、三発同時に撃ちゃあお前の虚閃の軌道くらいならずらせる」

「あーはいはい」

よーし、いける！

「まあ、そんなに完璧に出来た訳じゃねえから爆発しちまっ……あぁ！？　人が折角教えてんだから虚閃の準備してんじゃね……！！」

瞬間、ケロベロス野郎に向かって俺の虚閃が発射される。
だがケロベロス野郎はそれを辛うじてかわし、また接近。
「おい知ってっか？　戦闘中に説明すると負けフラグなんだぜ？」
「いや、不意打ちするヤツって大体返り討ちに遭うんだぜ？」
言いながら俺は細い分威力が凝縮された虚閃連射し、牽制。
当たっても当たった箇所を吹き飛ばす程度の威力だが、さっきみたいにデカい上に密度の高い虚閃よりは使い勝手がいい。

「んなもん当たんねえよぉ！」

対して俺に近付くケロベロス野郎は、探索神経を使いながら放たれてる俺の虚閃にも係わらず必要最低限の動きでかわしながら、響転を使い段々と迫って来る。

……ちっやっぱ細い分命中精度が下がってきやがる。

「らぁッッッ！！」

そこからまたしても爪攻撃。

「単調なことで」

俺はバックステップでかわす。

「どっちが？」

ケロベロス野郎からさっき似たような霊圧が。

……こいつはさっき感じた。虚弾だ！　爪による追撃も想定していたがどっちにしろ好都合。

「俺って接近戦もいけるんだぜ？」

俺はバックステップしてから直ぐに一歩踏み込みながらしゃがみ、空中に霊力で足場を作り浮いているケロベロス野郎の虚弾を回避。そこからジャンプしながらのアッパー。所謂カエルパンチ！

「当たんねえよぉ！！」

「（手札を一枚切ってやる！）」

俺が腕を振り抜いた瞬間金属がなり、ケロベロス野郎の真ん中の頭の顎が跳ね上がる。

「……ああ！？」

後ろに下がり、避けた筈にも係わらず自分の顎が跳ね上がったことにケロベロス野郎は驚く。

……チャンスだ。

俺はその隙を見逃さず、左手をケロベロス野郎に向かって翳し、虚弾で追撃。

「っくぅっ……！？」

俺の虚弾により後ろに吹っ飛んだケロベロス野郎に追撃をかけるため、細い虚閃を発射。

「……くそったれ！！」

これは流石に空中で体勢を立て直したケロベロス野郎が、俺の虚閃を当たる瞬間に虚弾で爆発させ、難を逃れたようだった。

「ああ、能力か……」

そのまま着地したケロベロス野郎は生きを整えながら、俺を睨みつつ毒づく。

「……バレた？」

さっきアッパーの際、腕から地面と平行に刃を伸ばしてそのまま腕を振り抜く事で、さっきから必要最低限の動きでかわしてるケロベロス野郎になら当たるだろ、と踏んでやってみたんだけどなぁ……。

俺としては刃でケロベロス野郎の真ん中の頭を縦に真っ二つのつもりだったんだが……流石にに硬えか。

「まだ能力が使えんのか。てっきりギリアンだから噛み付きとか虚

閃とかしかできねえのかと思ったんだがな」
「俺をそこらのギリアンと一緒にすんな」
「初めて見たぜ、そういうギリアンは」
「だから俺はそんじょそこらのギリアンとは違えの」
「まっお前の能力なんてよく分かんねえが、俺の皮膚には効かねえみたいだな」
ケロベロス野郎の言う通りだ。
その証拠に俺の腕から生えた刃はバッキリ折れている。
鋼皮(イエロ)……ではねえか。確かあれ、破面のだし。
でもアジューカスクラスとなるとそれなりに硬えのか？
「んじゃあそろそろ決着を着けてやらぁ」
俺がケロベロス野郎を警戒しつつ、思案しているとケロベロス野郎は三つの首を地面に向けた。
「（……何をするつもりだ？）」
ケロベロス野郎の三つ首の口元に虚閃に霊圧を感知。
「（あ？　こいつは虚閃？　……何をする気か分かんねえがチャンスだ、ケロベロス野郎には今俺が見えねえ！）」

俺は虚閃の準備に入ったが、

「遅え！！」

ケロベロス野郎は虚閃を地面に向けて発射。

「なんだ……とぉ！？」

野郎、俺らの足場を吹き飛ばしやがった。

とにかく今は脱出が先決だ。

俺らの足場が崩れていく中、俺は霊力で足場を作りそのまま跳躍し脱出を試みたが、

「させるか、よぉ！」

ケロベロス野郎が俺は突き落とすべく、俺の頭上に移動し俺の頭目掛けて、前足の爪を振り下ろす。

「くっ……！」

それを対処するために足場の霊力と跳躍を解除し、ケロベロス野郎に向けて虚閃を発射。

虚閃はケロベロス野郎に読まれていたらしく、当たらなかった上に発射した虚閃の勢いで俺は下に落ちる。

「うおぉぉぉぉぉぉ……」

底が中々見えねえ……。

俺はそのまま落ちていく。

ケロベロス野郎は流れに身を任せ、俺と並びつつ落ちてきた。

「うおらぁっ！！」

そこから俺の頭部目掛けて爪攻撃。

「おわっ……！？」

俺は一々折れる刃を掌から伸ばしては霊力に還元しつは伸ばすを繰り返し、なんとかケロベロス野郎の攻撃を凌いでいく。

「うおっ……！？　ちょまっ……！？」

「アッハッハァ！！　一緒にに落ちようぜぇ！！」

「チクショォォォォお……！？」

俺はケロベロス野郎とともに、深い地下に落ちていった……。

第十九話　やったか？って言うと大体やってない（後書き）

ケロベロスアジューカスとの決着が中々着かないｏｒｚ

次回こそ決着しますので、どうか「長えよ」と言わずお付きあい下さい。

では。

第二十話　食ウ物ト喰ウ者

「……はぁービックリした」

ここは何処なんだ？　しっかしケロベロス野郎の野郎、面倒な事しやがって……。

俺は結局ケロベロス野郎によって何か地下らしき所に落とされちまった。

ケロベロス野郎と落下しながら戦っている時に俺はこれ以上抵抗しても意味ねえと判断した結果、上に向かって虚閃（セロ）をジェット噴射のように使って逆に急降下して一旦ケロベロス野郎から逃れたんだが……。

……どうなってやがる。ケロベロス野郎は何故俺を追わねえ？

周りを見渡しても所々デカい木が辺り一杯に生えているだけ。さらには真っ暗で視界がわりぃ。これじゃあ安全かどうかもよくわかんねえ。

……ちょろっとサーチしてみっか。

「……っ！？　ああ！？　何だこりゃ！？」

探索神経（ペスキス）でサーチした結果、俺の周りにはピンからキリまで虚、虚、虚。ってこれ本当にどうなってんだ？

いや落ち着け。とりあえず保険として霊圧を抑えねえと。
ケロベロス野郎は……結構遠くに居るな。何のつもりで俺をここに落としたかは知らねえが離れてくれりゃあ好都合だ。
「しかしまあ、なんか見覚えあんなここ」
地下で天井は見えねえは木が一杯とか虚が一杯居るとか何だよここ。
……地下？　虚が一杯？

……ちょっと待て！！　もしかしてここって……、

ドドドドドド！！
俺がこの場所がどこか気付いた時に、何かが地ならしをしながら迫って来た。
……ギリアンの群れ？　霊圧は消してんだが……ここに落ちてきた音で来てんのか？
まあ、とりあえず隠れねえと。
俺は迫って来るギリアンの群れから少し離れた所で且つ虚の気配がねえポイントに隠れ、ギリアンの群れの様子を窺う。
しばらくするとギリアンの群れは俺が落ちた所に到着し、そこを囲んでいた。

つーかギリアンの群れか。やっぱり確定だ。どうやら俺は『メノスの森』に落とされたらしい。

ああ、面倒くせえ。
レベルアップイベントには最高だがいろんなフラグが立ちそうな厄介な所だちくしょう。大体アシドだっけ？　あいつどうすんだよ。
始解無しでアジューカス圧倒とか俺真っ二つじゃん。

……ダメだダメだ。
ポジティブに行かねえとやってられねえよ。
食料が豊富。それだけを考えろ俺。

「……おっ退いてくぞあいつら」

考えるのを一旦やめ、ギリアンの群れに意識を戻すと引き返して行くあいつらが。
流石俺の隠密スキル。浦原さんの黒い外套を使わなくてもギリアン程度は撒けるみてえだ。

……あ？　なんか一体もたついたギリアンがいるぞ。

見ると一体もたついたギリアンが。
当然ギリアン共には一体遅れたギリアンがいる事を気に掛ける程の知能を持ったヤツはいねえ。
一人遅れて焦る知能もねえ。

隙だらけだ。
これは……、
「いただきます」
だな。
俺は霊圧を抑えながら一気にそのギリアンの背後を取る。
仕留める手段は、
虚閃……霊圧で他のギリアンにもバレる。
能力……刃を出した時に出る霊圧でバレる。
となると、
「（……頭から噛み殺す）」
てなる訳だって……あれ？　噛み殺すって俺いつの間にこんなに狂った思考に？
俺の『心』は一瞬戸惑ったが俺の『体』は戸惑わず、

ぐちゃ……。

俺の目の前には首が無くなったギリアン。
俺の意志に動いた体。しかし俺の頭の中にはこの光景より更に残酷な思考。

「（な……！？　どうなっ……足りねえ……なんかおかし……足りねえ……足りねえ）」

次の瞬間今度はギリアンそのものが消える。
そして俺は何かを喰っている。

「（……まだだ。あと少し……）」

次に俺はギリアンの群れの最後尾のヤツを睨みつける。

「（あれを喰えば……あれを喰えば……）」

ぐちゃっ。

まただ。また居なくなった。

だが、ギリアンの群れは一体二体居たくなっても気にしてねえ。

「（あと……少し……）」

ああ……やべえ。段々何も考えられなくなってきた。

「（コイツヲクエバオレハ……）」

ぐちゃ……。

三体目だったか？　俺の意識はドンドン無くなってきた。

まるでそれに反比例するかのように俺の何かが満たされてきた。

俺の何かが変わる。

俺の何かは変わらない。

俺の何かが増える。

俺の何かは減っていく。

俺の何かが始まる。

俺の何かは終わる。
俺の何かが……。

……。

最後の俺の思考は、
「コイツらを全部喰う」
だったか？

……しかしまあ、何か変わっても霊圧を消したままなあたり、ホント……俺ら……し……い……。

……くそったれ。

……。

「おい、お前」

「ああ？」

「ギリアンの群れが一つ消えたぞ！？　それと一瞬だが妙な霊圧が。お前がここに来た事と関係しているのか？」

「知らねえよ。なんなら自分達で確認して来いよ」

「……ちっ」

「（やっぱアイツは普通じゃねえ。……楽しくなってきやがった！！）」

「何だ！？　今の霊圧は！？」

「もはやこの地には危険しか無くなった、か」

「……だがそれでも俺は、まだ……」

暗い暗い闇の中。
そこにはあるのは不安か動揺かそれとも……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3925k/

見た目は虚、中身は人間な俺

2011年3月2日00時34分発行